

上ノ國遺跡

— 檜山郡上ノ國村字上ノ國竹内屋敷遺跡発掘調査報告書 —

北海道檜山郡上ノ國村
同 上ノ國村教育委員会

同人會入團社委會員全
由團主領由團主領

1. 團會

上ノ国遺跡

— 檜山郡上ノ国村字上ノ国竹内屋敷遺跡発掘調査報告書 —

序 詞 上ノ国村長 沢村才藏
文 字 上ノ国村長 沢村才藏
上ノ国教育委員会教育長 中島勉

第一章 緒 言	一
第二章 遺跡の状態	二
第三章 遺跡調査の経緯と調査研究日誌	三
第四章 出土の遺物	四
I 第一層出土品	
II 第二層上の住居遺構	五
III 第三層—第四層出土品	六
第一節 土 器	七
第二節 石 器	八
第三節 装 身 具	九
第四節 自然 遺 物	十
一 動物骨格類	十一
二 貝	十二
類	十三

第五章 上ノ国遺跡総括
参考文献

序

上ノ国村は今はうらぶれた一寒村に過ぎませんが、松前藩の始祖武田信玄公の居城があつたこと、地理的に北海道の南端に位置して本州の文化が早く移入された等の關係から、北海道文化発祥の地として、史蹟・遺跡が非常に多く、上代文化研究の上に貴重な資料を提供して居ります。

上國寺、勝山廬跡、花沢廬跡等既に三件が道文化財に指定され、夷王山周辺に見られる百数十の墳墓群についても一部は明治大学後藤守一教授の手によつて発掘され、学問的に非常に興味のあることが証明されましたが、近い将来において、北海道大学北方文化研究室の手によつて更に研究が進められることとなつて居り、更に一件の指定文化財が加えられる見透しが強くなつてしまひました。

当村周辺においては諸所に土器、石器等の出土品が発見され、これ等の研究が当村在住の上ノ国八幡宮々司松崎岩穂氏の手によつて進められてきました。幸いにも北海道大学医学部解剖学教室大場利夫博士の指導のもとに、渡辺兼庸氏、松崎岩穂氏の御協力を得まして、三十一年八月に本格的に発掘作業が行われ、遠い道文化を解明する重なる資料数百点を得まして、爾來その出土品の整理、復元の仕事が続けられましたが、本年四月漸く完了しまして、この度これが報告書を刊行する運びに至りましたことは誠に喜びに堪えません。

この研究報告書の刊行に当り大場博士をはじめ、それに御協力下さった方々に対し、衷心致意と感謝を申し上げると共に、この報告書が北方文化研究の上に裨益することを信じまして広く御紹介申上げる次第でござります。

北海道檜山郡上ノ国村長 沢 村 才 藏
同 上ノ国村教育委員会教育長 中 島 勉

the first time, and I am sure it will be the last. I have been to see him twice since, and he has been to see me once. He is a very good man, and I am sure he will do well.

I have been to see Mr. and Mrs. Smith twice since, and they have been to see me once. They are a very good family, and I am sure they will do well.

I have been to see Mr. and Mrs. Johnson twice since, and they have been to see me once. They are a very good family, and I am sure they will do well.

I have been to see Mr. and Mrs. Brown twice since, and they have been to see me once. They are a very good family, and I am sure they will do well.

I have been to see Mr. and Mrs. White twice since, and they have been to see me once. They are a very good family, and I am sure they will do well.

I have been to see Mr. and Mrs. Black twice since, and they have been to see me once. They are a very good family, and I am sure they will do well.

I have been to see Mr. and Mrs. Green twice since, and they have been to see me once. They are a very good family, and I am sure they will do well.

写真1 上ノ国道路の遠景



写真2 上ノ国道路発掘前の状態



写真3 遺跡の地層の状態

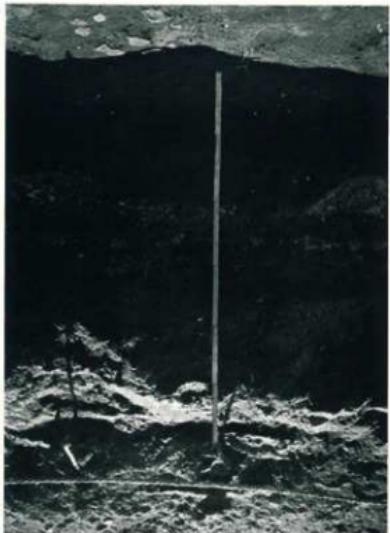


写真4 遺跡の発掘状況



写真5 遺跡の内部に認められた住居遺構



写真6 住居遺構における柱穴の状態

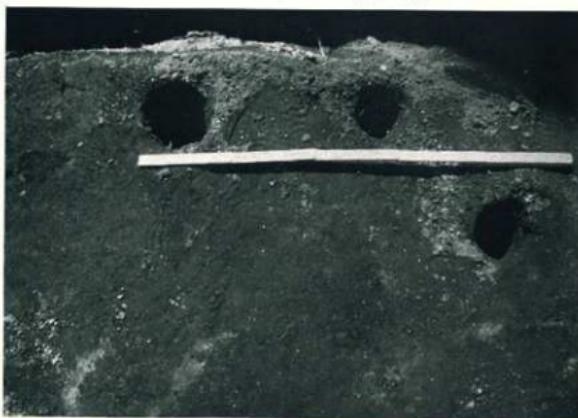


写真7 遺物の出土状態



写真8 遺物の出土状態



写真9 土器の出土状態



写真10 土器の出土状態



写真11 石器の出土状態



写真12 石器の出土状態



写真13 石器の出土状態



写真14 装身具の出土状態



写真 15 第一類土器（左A-2 右A-5）



写真 16 第一類土器 (A-4)



写真 17 第一類土器（番外1）



写真 18 第三類土器（左番外2 右番外3）



写真19 第三類土器 (A.1)



写真20 第三類土器 (A.3)



写真 21 第四類土器 (A.336)



写真 22 第四類土器 (左 A.338 右 A.337)

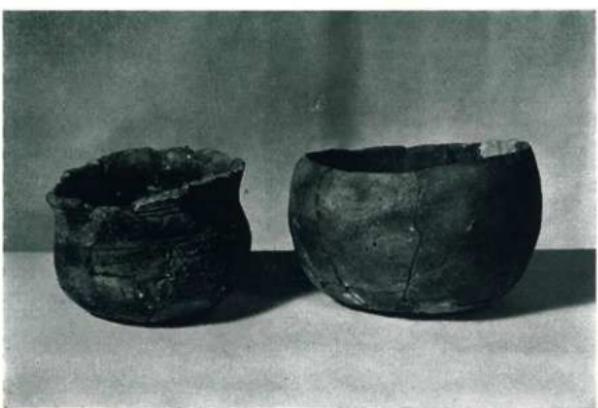


写真23 第一類土器破片



写真24 第一類土器破片

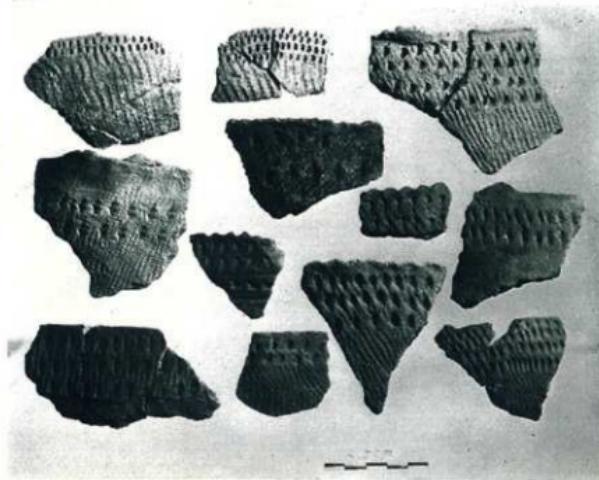


写真25 第一類土器破片

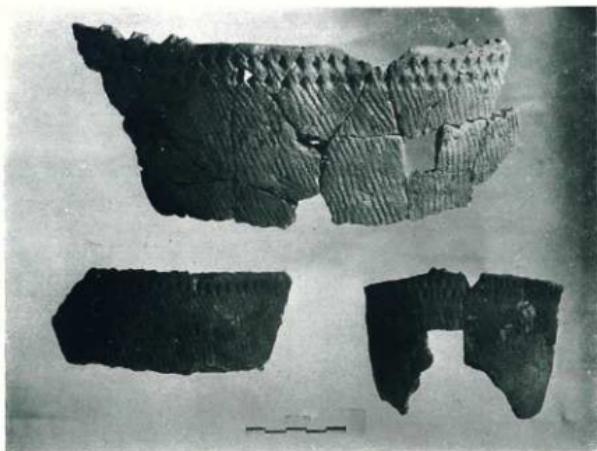


写真26 第一類、第二類土器破片



写真27 第二類土器破片

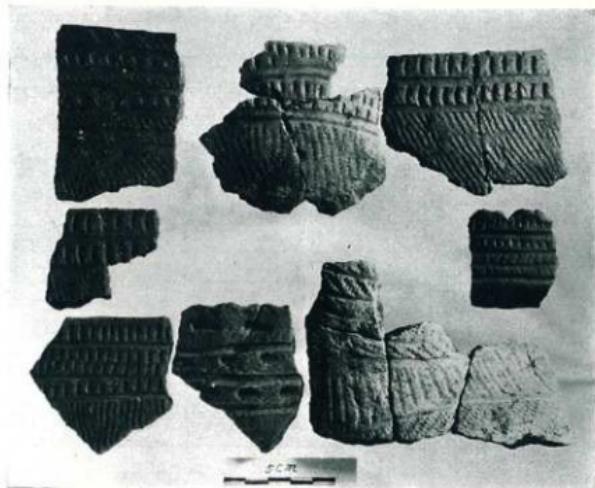


写真28 第二類土器破片

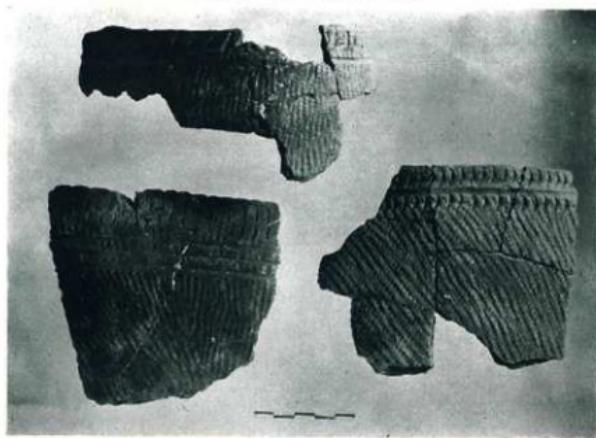


写真 29 第二類、第三類上唇破片



写真 30 第三類、第四類土器破片



写真31 第四類土器破片

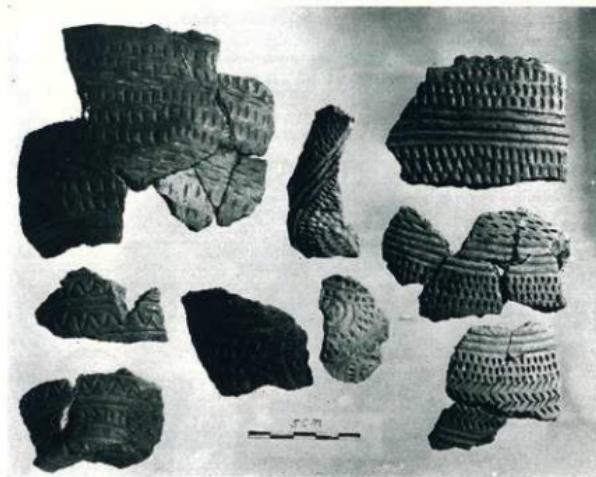


写真32 第四類土器破片

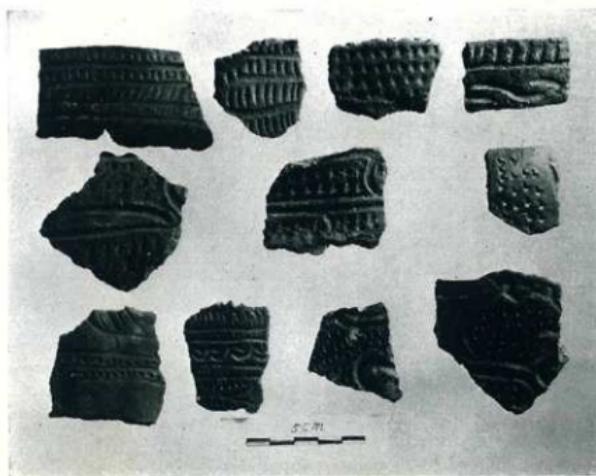


写真 33 第三類、第四類土器破片



写真 34 第一類、第四類土器破片

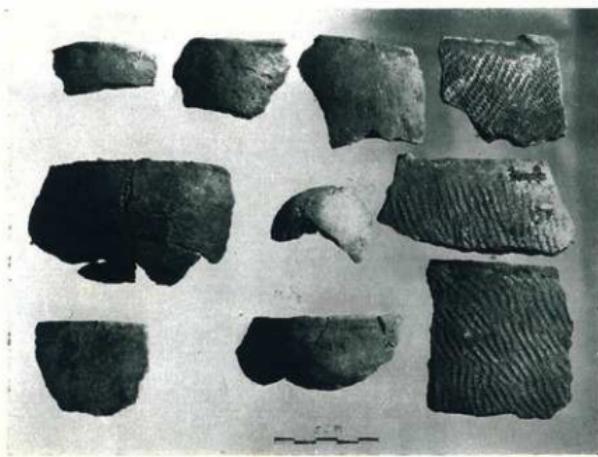


写真 35 第四頃（朱塗）土器破片

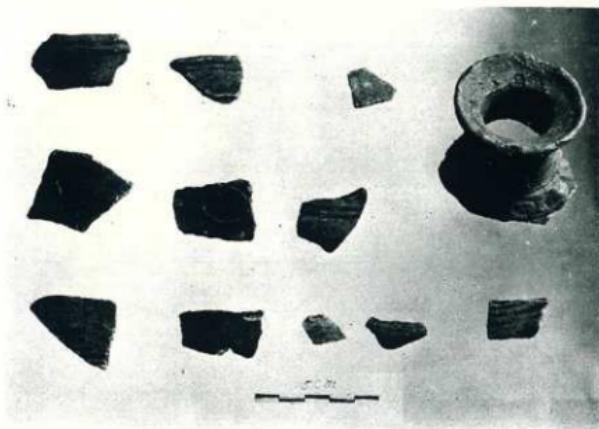


写真 36 上層出土の擦文式土器及び須恵器



写真37 出土の石器類

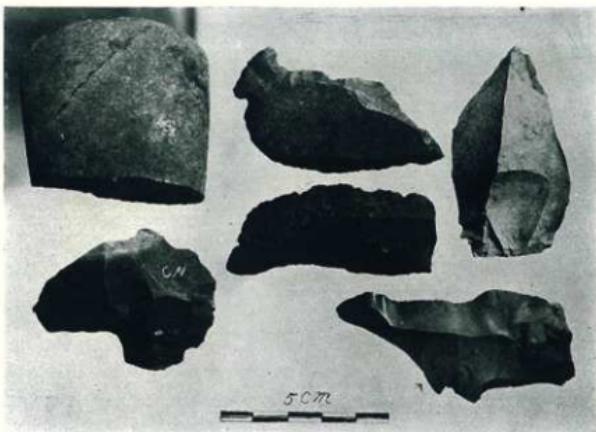


写真38 出土の石器及び装身具

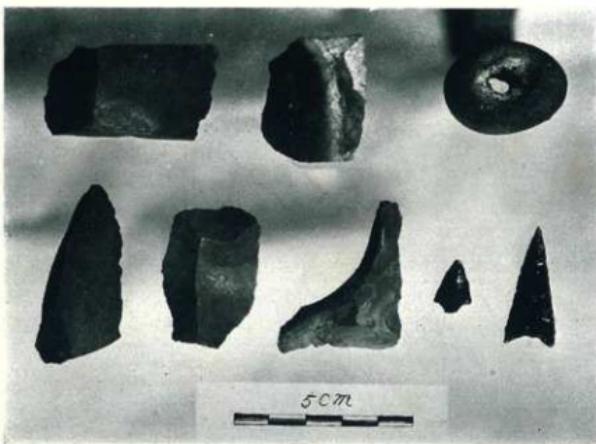


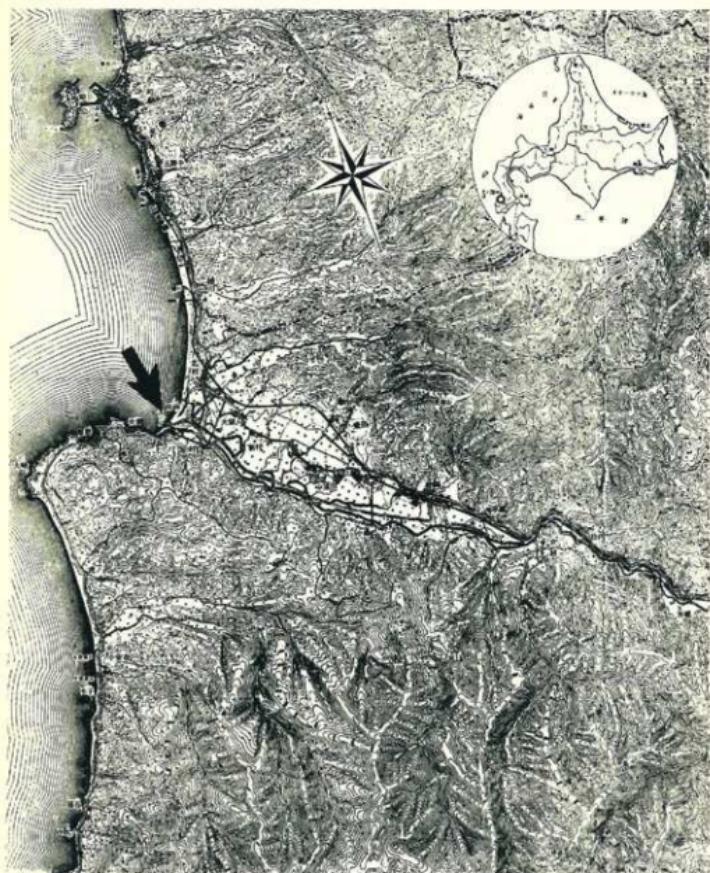
写真39 出土の骨格類



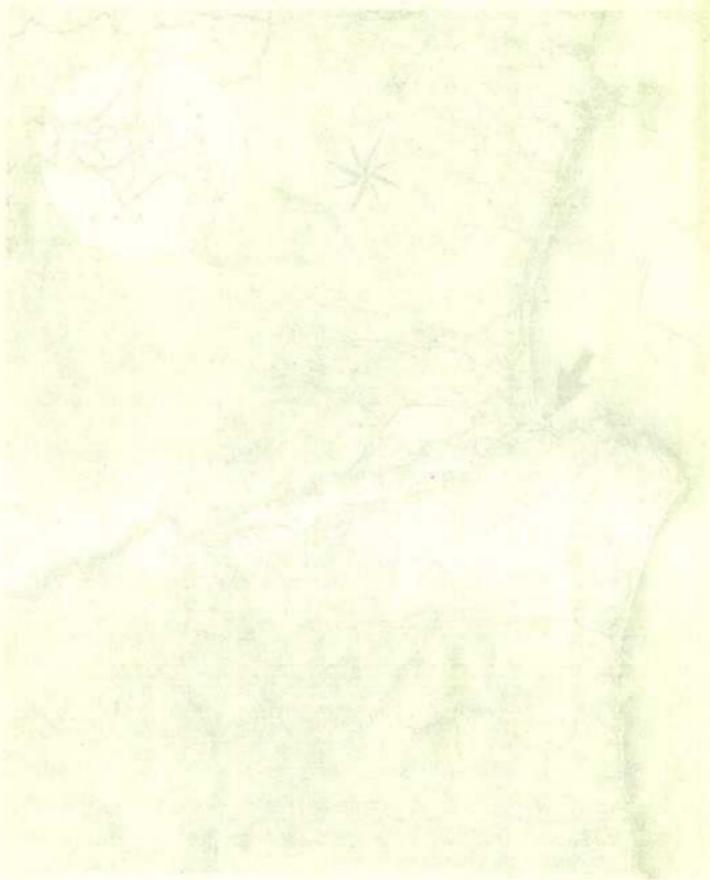
写真40 出土の貝類



上ノ国村附近の地図



卷之三



上ノ国遺跡

—檜山郡上ノ国村字上ノ国竹内屋敷遺跡発掘調査報告書—

渡大松
場崎辺
利岩兼
夫穂庸

第一章 緒 言

上ノ国遺跡は、北海道桧山郡上ノ国村字上ノ国市街地川合政義氏宅地の裏手に当り、大淵湾に臨んで所在している。すなわち江差線上ノ国駅から中外鉄山行のバスで二軒、上ノ国停留所から市街地並みに一五〇メートルで同地に達する。

本遺跡の存在する宅地は、もと竹内氏の所有地であったので、昭和三〇年刊行の「桧山南部の遺跡」には遺跡名を「竹内屋敷」とし、左のように記したが、ここに再録する。

竹内屋敷。上ノ国市街地の竹内吉蔵氏屋敷の裏手に当る海沿いの地面は、年々時代化に削られているが、昭和三〇年二月の時代化の際に大きく削られた。それによつてその切割に土器片が層をなしていことがわかつたので、隣家の海浪道造氏に依頼してその一部を収集することができた。その後本地は再び削られたので、今は僅かに土器破片を散見するのみになつてゐる。なお本遺跡からは他遺跡には見られない型式不明の、おそらく前期の土器と思われる破片が數片出土している。石器は破片が僅かに見られるのみである(第一一一一二二四及び写真一一参照)。

前述の文章に見られる「他地域に見られぬ型式不明の土器」についての解明は、年来の宿題となつていたので、昭和三四年上ノ国村教育委員会は、その正式調査を企図し、北海道大学医学部解剖学教室兒玉作左衛門教授並に伊藤昌一教授に大場利夫の派遣を乞い幸に譲承を得たので、八月三日から五日に亘つて発掘調査を実施した。

調査の結果、本遺跡は、主として縄文晩期の大洞B乃至大洞B-C式に比定しうる遺物を包含する遺跡であることが明らかとなり、しかもいわゆる龜ヶ岡土器分布圏内の他地方の土器に比べて著しい特色が見られるので、上ノ国式土器と仮称することとした。

上ノ国市街地には、大調湾に望んで他にも類似の遺跡の存在が見られる。すなわち三三年九月市街地の海岸護岸築設復旧工事に当り、大調湾の凹部にあたる草間恒二氏宅地裏手において、標高が水平線それ／＼の護岸基部から上げられた泥土の中に、鉄錆の付着した多数の土器片が発見された。それらは復原可能な土器一ヶを含むが本遺跡出土の土器に類似している。また三四四年七月大調港開港工事施行中、砂礫置場の構築により、標高四メートルの海沿いの地点でも、同型式の土器破片が出土している。これらの事実から推察すれば、本沿岸一帯には縄文晩期の遺跡が存在していたものと考えられるので、本地域を總称して上ノ国遺跡と名付けることにした。

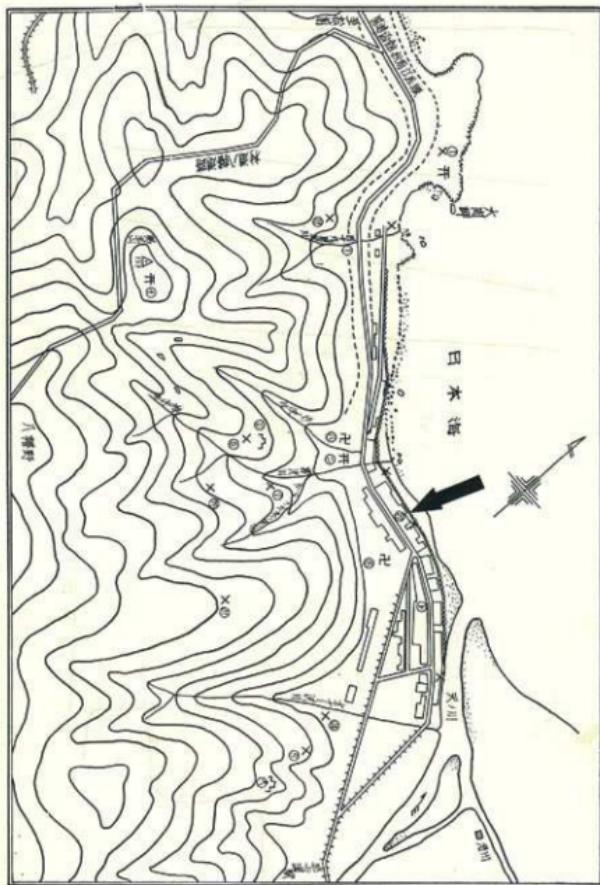
第二章 遺跡の状態

本遺跡は八幡野から発達した丘陵が海に突出した地点に当る。こゝを境に東すること一五〇メートル余で土地は低くなり、天の川沿いの平野となつてゐる。また本遺跡前面の海は遠浅で海底に無数の岩石が存在するが、大調湾寄りに水深は次第に大きくなる。すなわちこの地点は、かつて陸地が海中に相当に突出し、西北の大調岬と対照して良浜を形成していたことが考えられる。大調岬に対しこの東の突出点の基部に本遺跡が存在し、西北の突出点の大調岬の基部と、大調湾の凹部に当る上ノ国八幡宮の小川の川口と同年代の遺跡が存在しているわけである。

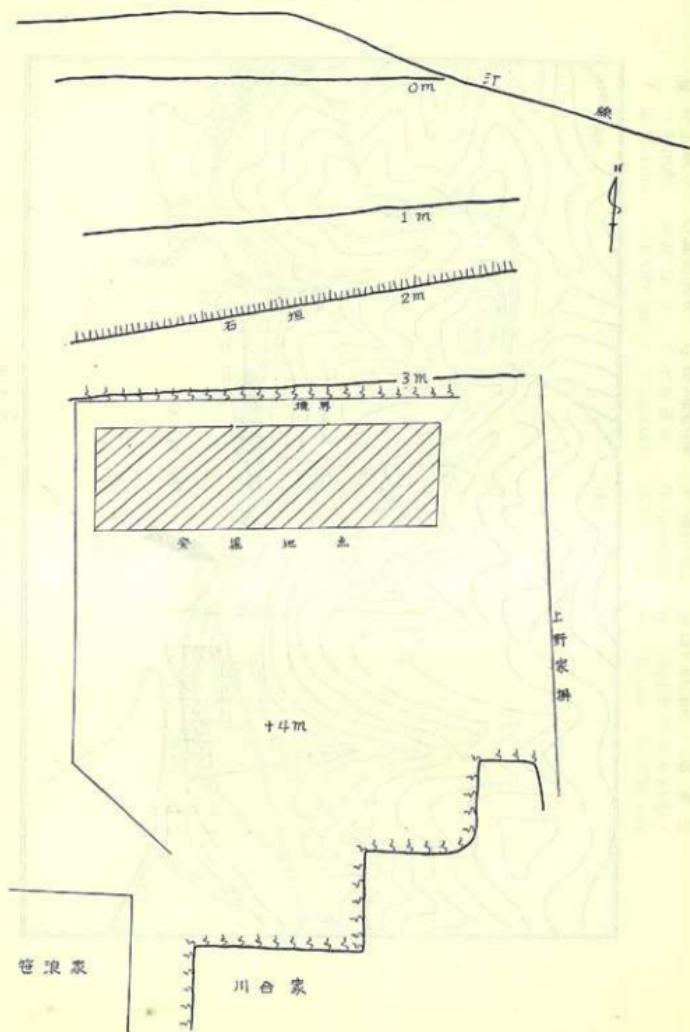
その後、天の川が移動して川口が本遺跡の突出部に添うて開け、突出部を浸食し、更に波浪がこれを削つたので陸地が次第に減少し、今日の姿を呈したものと考えられる。上ノ国市街地には、かつて現在の国道のほかに本遺跡の辺りから東へもう一つの道があつて、道の北側で現在海になり、時には天の川の流れとなる辺りに、家屋や雜物のあつたことを記憶している老人がいる。石場として賑わつた大調湾の練漁業は、明治末年から没落したが、その頃から、ことに海水の浸食が著しかつたようである。村役場の土地台帳に照合してみても、これら海沿い及び川沿いの宅地は昔に比べ現在は著しく減少になつてゐる。

現在も大の川の河口は常に変遷しており、海中に砂州ができる、この遺跡の二、三メートル先が川になつたり、砂が堆積して十数メートルまでが砂浜になつたり、また黒々たる岩石が遺跡の二・三メートル先に現われ、それを海波が洗つてゐることがある。こうした事情から推察すれば、本遺跡の遺物包含層の多くは既に濱滅し去つたものと考えられる。なお三四四年九月台風の高潮によつて本遺跡は一層削られたが、三五年に災害復旧工事をして護岸工事が施工されたが、護岸は低いので、海が大きく荒れる時には、波は護岸を超える状態である。

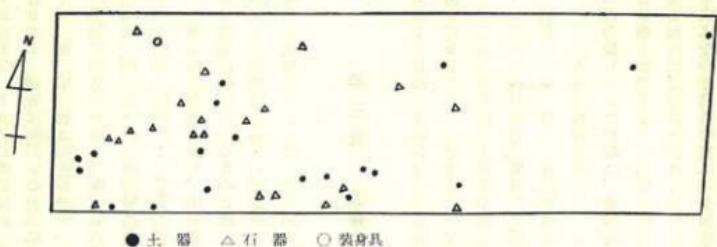
第1図 上ノ田道路略図



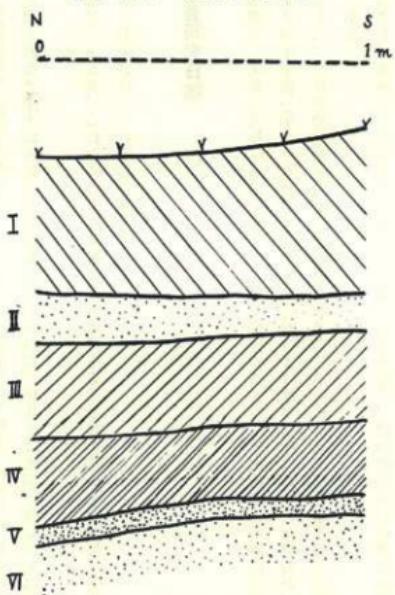
第2図 滝跡の略図



第3図A 遺物の分布図



第3図B 遺跡の地層図



I 棕色表土層 II 棕色砂層 III 茶褐色砂質土層
IV 黑色砂質土層 V 黑褐色砂層 VI 黄色砂層

本遺跡の海寄りの地点の標高は約三米であるが、山際に向い次第に高くなっている。遺物包含層は、現在標高一三米、奥行凡そ六一七米の間に存在する。調査は海沿いの仮場に沿つて幅一〇米、奥行三米の区域を設定して行なった。地層は上層より數えて、第一層は褐色表土層で二五厘一五〇厘、第二層は褐色砂層で一五厘一三三厘、第三層は茶褐色砂質土層で二七厘一三三厘、第四層は黒色砂質土層で二三厘一五〇厘、第五層は黒褐色砂層で五厘一六厘、第六層は黄色砂層で基部まで続いている。

遺物は第一層、第三層、第四層に包含されていた。なお南側の壁の西端の近くでは、第三層と第四層の中間に幅一・五米の砂礫層が露呈した。また区画の内部に直径四・八五米の円形に近い平地住居跡の一部が認められた。床は約一〇厘の厚さの粘土で固められ、周辺に直径一〇厘前後、深さ一〇厘前後の柱穴を配置し、中央部にも柱穴が見られた。床上には木炭末が多数に認められた。住居跡は西側の壁の近くにも拡大しており、区画外の隣地に統一しているものと推定された。

各層出土の遺物は土器・石器並びに自然遺物などであるが、これらについては第四章に記述する。なお遺跡の地層は第三図Bに示し、土器、石器の出土状態については、第三図Aに示したので参照されたい(第一図—第三図)。

第三章 調査の経緯と調査研究日誌

本遺跡の発見は、先行なった大畠遺跡の発掘調査(昭和二九年八月二七日—三一日)の後のことで、竹内家裏手の砂浜で遊んでいた子供達が土器を採集したことに始まる。すなわち当時上ノ国小学校一年生の高橋公平君が本遺跡附近より採集し所持していた資料を、松崎がもらを受けたが、これら遺物の出土個所の確認を行うとともに、子供達の乱掘を戒めて本遺跡の破壊に注意を払つた(なお報告書「松山南部の遺跡」第一一・一二、図、浅鉢型の土器及び土器片がそれである)。

偶々昭和三〇年二月二〇日に風雪注意報が発令され、風速二〇米から三〇米に達するという予報で、村の消防団が夜警に出動した程で、ラジオはしきりに各地の被害を伝えていた。翌二二日風は次第におだやかになつたが、時々吹雪になつていて、こゝ数日来勝山館遺跡出土の土器の復原に夜を費していた松崎は、衆議院議員選挙の立会演説に赴くために家を出たが、同演説会は翌二二日であることが判つたので、ついで暴風の被害状態を観察するため浜へ出て見た。漁業組合の下の波浪よけのコンクリート護岸が崩壊して車庫の端が空間にとび出しており、竹内屋敷の遺物包含層は波に打たれて新しい欠損の跡が見られ、所々丸い穴があいて、土器破片が見えていた。また西隣りの笠浪氏宅裏の欠損地の、少しく穴になつた箇所の奥に、土器破片がのぞいていたので、傍らの一、二片を拾い、大き目の石を一、三ヶそこにあるてふさいだ。また東隣

り屋敷の矢来も倒壊して舞倉が欠損して塹の上にはみ出していた。翌日笠浪氏の了解をえて、先の石を除いて土器を取り出したが、本土器は九種無文の土器であり、波がしみこんで凍つたせいか、ぼろぼろになっていた。幸い一かたまりであったので、後に復原することができた。本資料が「松山南部の遺跡」第一回左下の臺形の土器である。

「松山南部の遺跡」は、はじめ大調查の調査の報告書を出すことで、上ノ国村教育委員会が企画したのであるが、これに上ノ国村内の遺跡の概要を加え、更に江差高等学校官下教諭の調査した江差町の遺跡を加えることになり、上ノ国村教育委員会は江差町教育委員会に交渉して、同教育委員会の共同刊行ということになったのである。本事情はさておき、三十一年四月北海道大学の大場は松崎宅に来泊して、大調查の報告書を作製のための遺物の整理精査に当り、諸種の打合せをしたが、旧竹内屋敷遺跡の土器に注目し、型式不明の土器として、これの解明の機会を待つことにした。

これより先、松崎は昭和二六年秋、勝山館遺跡の一隅に顔を出して土器の採集に手をそめ、出土した多くの遺物をかゝえて廻遊に窮していた。昭和二七年八月松平義人氏の仲介で明治大学文学部後藤守一教授の米村となり、松崎宅を根拠に夷王山墳墓群に科学のメスが加えられ、更に勝山・大瀬・十兵衛沢等の仮調査がなされた。その時一行の中にいた吉崎昌一氏は翌年八月末村して、円筒文化の解明を志していた明治大學文学部考古学研究室の渡辺兼庸を松崎に紹介した。渡辺は「八年一〇月を松崎宅に通し、松崎と共に勝山や十兵衛沢の遺物遺跡と取り組んだ。二九年四月、関係遺跡である假川や江差町茂尻遺跡の調査に当り、兩人は乙都村原川まで足を伸した。前肢があるといわれた鰐の化石の出土の端緒を据んだものとの時のことである。その後、東京大学東洋文化研究所に籍を置いた渡辺は、三三年佐藤逸夫氏らと吉森景六ヶ所村の遺跡調査に出張したが、その帰路である八月に上ノ国に来村して前記の遺跡の再調査を行つた。その結果は三四年、考古学雑誌第四四卷四号に松崎、渡辺両者名にて、「北海道假川、勝山館、十兵衛沢遺跡」の報文を掲載することをえた。渡辺が上ノ国瀬在中に竹内屋敷の欠損点の地層を測り、海面との関係を見たりしたが、渡辺も本遺跡出土の遺物の編年に疑問を表してゐた。本遺跡にはまだ相当量の遺物の埋蔵を確信されるものがあつたので、遺跡の破壊を警戒して、正式調査による解明の機会を待つていた。

その後本遺跡地帯は、年毎に欠損を増していたが、ここは畑地として、水田の苗畑に使用され、秋に施肥して春は早く播種し、これが済んだ後は、野菜畑として使用されることが繰返されていた。三四年竹内家敷は川合政義氏によつて旧家屋が解体され、新築工事が始められたので、遺物包含地の半ばは放置されることになつた。愈々本遺跡調査の機会が熟し、幸い川合氏の発掘調査の承諾をうることができたので、松崎は本村教育委員会に調査の主体となることを懇請した。教育長中島勉氏は快くこれを承諾したので、直に北海道大学の大場に連絡した。大場は室蘭、女満別における調査に多忙を極めていたが、かねてこの日を期していたので直にこれに応じ、本遺跡の調査を八月初旬に決行することにし

た。村教育委員会も北海道大学医学部に依頼して大場派遣の承諾をえたので、文化財保護委員会へ正式調査の手続をとつた。折から渡辺兼庸は弘前市教育委員会の招きにより、岩木山遺跡調査（同年五月一—〇月末日）に赴いていたが、連絡により日程を割いてこれに参加することになつた。調査は八月三日より、同六日まで行われた。発掘作業には村教育委員会の職員のほかに、上ノ国中学校長沢田誠氏に協力を依頼し、同校生徒十余名が出動した。調査の状況はつきの如くである。

調　　査　　日　　誌

八月一日（土）曇

発掘諸準備を行う。竹べら作り、道具箱（果物の空箱）一五ヶを購入、平板計測器、ボール、荷札、新聞紙、紙袋、小等を整える。夜、弘前から渡辺兼庸が来宅する。

八月二日（日）曇

本日も発掘器具の整備を行い、村教育委員会布施潤一郎次長に発掘調査時の写真撮影を依頼し、上ノ国中学校に協力方について連絡して発掘準備を終る。夜、渡辺と松崎は大場を上ノ国駅に迎え、松崎宅で発掘調査の打合せを行う。

八月三日（月）晴

輝く朝の日ざしを浴びて、スコップ、移植べら、弁当持参の中学生達が、早くから松崎宅前に集まる。八時出発して現場に向う。

照りつける日ざしに輝く遺跡地の眺めは又となく美しい。北海道の歴史に明けをよんだ上ノ国の一地である。松前藩創業の歴史の故を以て北海道文化財に指定され、円筒文化の遺跡として知られている勝山駄駄の鮮かな木々の緑に、北海道最古の木造建築物として、道文化財指定の上國寺本堂の赤い屋根が映え、夷王山が静かにこれを見おろしている。早期の遺物を収めてはり出す大瀧岬に抱かれる紺碧の海の色、天の川口から砂浜の向うにつづく、追分の江差の町なみに、水平線をかぎつて彎曲してつゞく住時の西瀬夷地の熊石、久遠の山々が青くかすんで大瀧岬に迫り、奥尻島も望見される。

（参加者氏名）

大場、松崎、渡辺並びに上ノ国村教育委員会教育長中島勉、同次長布施潤一郎、上ノ国村役場筆浪甲衛、上ノ国中学校教諭瀬川和夫の各氏、上ノ国中学校生徒篠瀬伊佐雄、草間俊彦、城戸齊、上野広、愛場一充、稻穂鶴、前田昭彦、森茂信、小林信之、若山忍、若山栄子、熊谷順子、

工藤藤子の諸君。

遺物包含地の中の海寄りの地域に、長さ一〇米、幅三米の区画を設定して発掘にかかる。渡辺は中学生を指導して遺跡の実測にかかる。遺物係、記録係などの分担を決める。

発掘作業は進行し、第一層表土の剥離から第二層、更に第三層に及び、土器破片がしきりに出土する。午後四時作業終了する。型の深鉢形土器一ヶが出土する。午後五時作業終了する。

夜出土の土器破片の中から數片を選んで水洗する。

八月四日（火）晴

上ノ国八幡宮の林にミン／＼煙が鳴きはじめ、照りつけて暑さをびしいが、遺跡地は海を渡る微風が快く、さ程苦痛を感じない。振り上げた土砂は山となつて、教育長中島氏や、写真係を担当する布施氏までその整理にスコットを振る。

第四層西隣地寄りの地区からしきりに土器が出土して皆を緊張させるが、完形らしいものは見当らない。南よりの壁に砂礫層が現われる。昨日からの平地住居址は柱穴などとともに完全に姿を現わしたので実測図をとる。教育委員会の川合政義氏（地主）も来接する。渡辺は岩木山農調査の都合で一先ず弘前に帰ることになり、終列車で上ノ国を辞する。

八月五日（水）晴

第四層剥離作業を繼續する。住居址の下層には土器が少なく、土器は専ら住居址と隣地の間で出土する。遺物は南寄りの地区の奥に統いて埋蔵されているようすに推定される状態である。

三日からこの方、作業班の中学生は三時になると、川合氏の隣側に腰をかけたり、その辺の日陰に屯して、教育委員会からのパンやアイスキャンディを食べて少憩する。中学生達は一日中係員の指示に従つてよく働くので感激する。また沢田校長は連日作業場に現れ、熱心に見学し生徒達に無言の激励を与えていた。五時過ぎ作業を終る。本日を以て今回の発掘作業は終了する。

八月六日（木）晴

発掘埋めもどし作業を行う。教育委員会から人夫をもらひその完全を期した。朝から中学生数名が、松崎宅の庭の池に会して土器水洗を行なう。慶応義塾大学江坂郷勢氏米宅し、大場らの案内で発掘地点を視察する。出土の遺物について意見を交し、松崎保管の遺物を調べて写真を撮影する。午後教育委員会差贈しのハイヤーで、大場、江坂氏、布施教委次長、松崎は、夷王山、八幡野を経て大崎に廻り、遺跡の視察をする。（遺跡、史跡の豊かなこの辺りは、夷王山史跡群と名付けられた地であり、昭和三五年指定されて北海道立松山自然公園となつた景勝地でもある。）

ある）。午後、江坂氏が昨年仏領印度支那を視察された折の幻燈スライドを見学する。これには発掘調査に参加した中学生を始め、近所の人達も集まり、松崎宅の広庭敷で興味深く観覧し、説明に耳を傾ける。終つて教育委員会主催の慰労会が開かれ、大場、松崎のほか、江坂氏、沢田々長、中島教育長、布施次長、沢田校長らが出席する。

八月七日（金）晴

一番の列車で大場並びに江坂氏退村する。松崎は中学生有志とともに土器の水洗と、調査の後かたづけを行なう。

八月八日（土）晴

本日も中学生有志が集まつて土器の水洗を行う。松崎は発掘遺物の整理を継続する。

研究日誌

八月十日、渡辺兼庸は再び来宅し、同一二日帰弘するまで、土器の整理と研究を行なう。なお松崎は同一日から夏祭りが始まり、九月末まで多忙を極めたが、一〇月に入つて連日土器の整理を行なう。

一〇月二十一日、爾志郡明和小中学校に佐藤邦夫校長を訪ねる。同氏らの案内で同日三ヶ谷に小貝塚を発見する。ここは昨年秋の台風十四号に洗われて貝層が露出して白くなつており、上ノ国遺跡出土の土器と類似の土器破片を発見する。

昭和三六年一月十九日、上の国村教育委員会の招きにより大場米村し、同二日まで松崎宅において遺物を精査し、報告書刊行の準備を行なう。大場、松崎を始め、教育長中島勉氏、同次長布施潤一郎氏、同委員会森兼雄氏らが手伝う。

本報告書は上ノ国村並びに上ノ国村教育委員会森兼雄氏、同次長布施潤一郎氏の特別な計らいと、熱心な推進により刊行される運びになつたが、ここに筆者一同皆様の御厚意に対し感謝致します。

第四章 出土の遺物

本遺跡より出土した遺物は、土器、石器、裝身具などの人工遺物と、動物骨格、貝殻などの自然遺物である。なお土器は第一層より擦文式、須恵器などが少數出土しているが、第三層及び第四層よりは繩文晚期のいわゆる亀ヶ岡式土器の系統のもので、大洞B、B-C、Cといわれる

時期のものが出土している。また石器、装身具、その他の遺物はすべて第三層—第四層出土品である。これらについてその大略を述べればつきりである。

I 第一層出土品

本遺跡の第一層出土の遺物は擦文式並びに須恵器であるが、これらはすべて破片のみである。その数は擦文式土器口頸部破片一〇片、体部破片四〇片の計五〇片と、須恵器底部破片一ヶ、体部破片一ヶの計二片で、総計は五二片である。これらの土器破片によつて、本式土器の特徴をあげればつきりの如くである。

(擦文式土器特徴) 脱土に砂粒を含み、焼成温度高く茶褐色をなす。厚さは比較的薄く硬い。形態は深鉢形、浅鉢形が見られる。深鉢形土器は口頸部が強く外反した形態のものが多い。口縁は水平口縁で底は平底である。大きさは大小あるが、大なるものでは高さ三〇厘米位のものがある。文様は器面全体に整調済様の擦痕が見られるほかに、口頸部並びにその附近にのみ、刻線及び短刻線を並行して數条印刻される刻線文が見られる。本遺跡出土の擦文式土器を木道北部地帯に見られる擦文式土器に比較しての差異は、文様が単純で、その殆んどが口頸部に施文され、体下部には見られないことである。

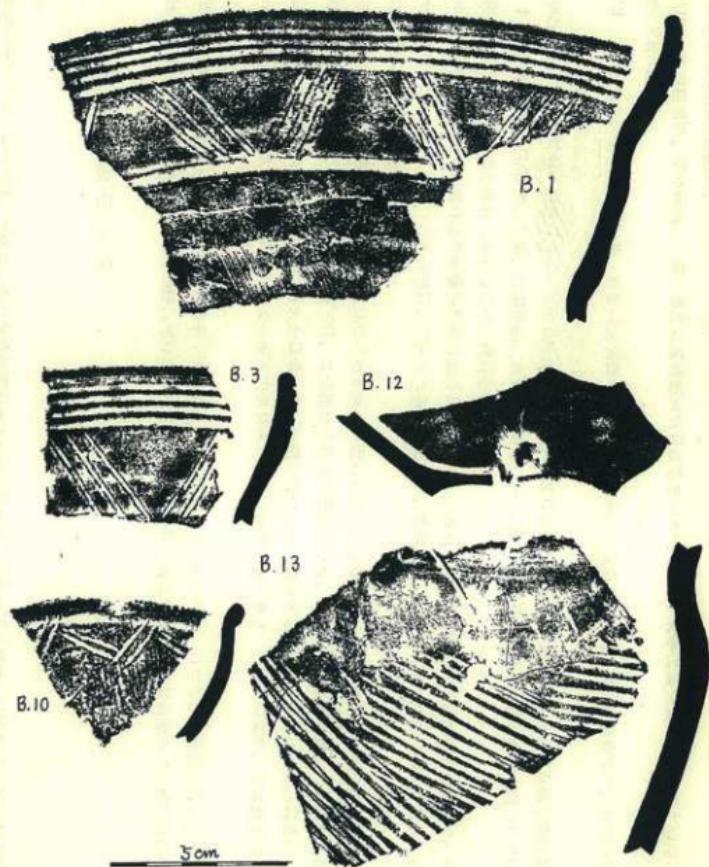
また本式土器と混合して同時に出土した須恵器は、いずれも破片であるが、焼成温度高く、灰色をなしている。一例は高さ二〇厘米以上の要形土器と推定されるもので、文様は体部に斜の线条を粗雑に刻んでいる。また一例は小型要形または壺形土器の底部である。文様らしいものがないが、標識模の一ヶの瘤状の突起が脚部に認められる。底は掲底である。

例1 B.1 口頸部破片、高さ推定三〇厘米、口径推定二五厘米、厚さ〇・八一—一厘米。器形は深鉢形で口縁は水平をなしている。文様は口頸部に四条の刻線を刻しており、それより頸部にかけて三条の斜行の短刻線を山形に刻んでいる。地文的に体部全面に擦痕が見られる(写真三六及び第四図)。

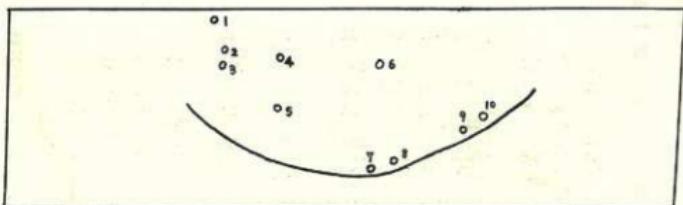
例2 B.3 口頸部破片、高さ推定二〇厘米。器形は深鉢形で水平口縁をなす。文様は口頸部に刻線を四条現らし、斜行の短刻線を山形に刻んでいる(写真三六及び第四図)。

例3 B.10 口頸部破片、高さ推定一〇厘米。器形は浅鉢形または高杯形と考えられる。水平口縁をなし、文様は口頸部に二条の短刻線を山形に刻んでいる(写真三六及び第四図)。

第4図 第一層出土の擦文式土器並びに須恵器



第5図 住居遺構



(註) 床面は+2.92m. 柱穴(○) 1=-9cm. 2=-12cm. 3=-28cm. 4=-10cm. 5=-11cm.
6=-24cm. 7=-20cm. 8=-24cm. 9=-14cm. 10=-8cm.

例4 B.12 須恵器、底部破片、厚さ○・三種。器形は壺形または壺形と思われる。底は錐底である。焼成温度高く、硬度も高く、厚さは薄い。縦縫を以て整形され、底は糸切り底である。

文様は見られないが、脚部に一ヶの突瘤が見られる(写真三六及び第四図)。

例5 B.13 須恵器、頸胴部破片、高さ推定三〇cm、厚さ○・八一一種。器形は壺形と思われる。焼成温度高く、硬度も高く、厚さは薄くない。文様は体部に条縞文を斜に並行して粗雑に施文されている(写真三六及び第四図)。

II 第一層上の住居遺構

第一層剥離作業中に区画内に住居遺構の一部が発見された。土地の都合で、これを拡大追究することはできなかつたので、その全貌は明らかでないが、つぎのことが確認された。

形態は直径推定四・八五メートル前後で円形に近い。堅穴的な壁は有していない。床上は厚さ六一一〇種の粘土で固められており固い。円形の輪郭の内部の辺縁に沿つて比較的整然と柱穴が排列されているが、内部にも見られる。発見された柱穴は比較的小で、直径一〇種前後の円形のものが多く、深さは八種一二八種前後である。床上には焼土と無数の木炭末が認められる。なお床面の高さは現汀線よりナニ九・一メートルである。遺物は本住居と関連した確実なものは見られない。

上述の如く住居の構造、位置などから推察すれば、本住居の構築された年代は、第一層から出土した擦文土器文化期に近いものと思われるが、擦文文化期と決定しうる関連は見だせない。従つて本住居は擦文文化期乃至それ以前に構築された平地住居跡と考えられる(第五図)。

III 第三層—第四層出土品

第三層—第四層出土の土器は縄文晩期の土器のみで、その他のものは混在していない。土器はいわゆる亀ヶ岡式土器といわれるものである。亀ヶ岡式土器については、東京大学理学部人類学教室山内清男氏の研究によつて、大洞B、B-C、C1、C2、A、A'の六型式に細分されることは既知の事実である。

本遺跡出土の土器は上述の大洞B、B-C、C1式といわれているものが、その大部分を占めているが、本型式の範疇に入らない種類の土器もこれと併存している。なおこれらの土器についての層位関係については、遺憾ながら本遺跡では確認することができなかつたので、今仮に主體文様を基礎にして第一類、第二類、第三類、第四類の四種に分類して記述する。なお厳然と各類に分類し難いものもあるが、これらはより近い特徴のものに含めていく。

第1表 観察土器の数

出土品	番外	合計
復原したもの	11	2
破片	243	5
口部	30	
胴部	54	
底部		
合計	338	7
		345

(註) 番外は隣接地より採集したもの

第2表 各類土器の出現頻度

型式	第一類	第二類	第三類	第四類	合計
深鉢形	138	26	53	42	259
浅鉢形	12	7	18	33	70
皿	1	4	5	1	2
碗	1			3	13
注口形				(1)	(1)
合計	152	37	76	80	345

(註) ()内の土器は隣接地より採集した番外品、深鉢形と浅鉢形は区分できないものもある。

出土の土器の数は、復原したもの一二三ヶ(番外二ヶを含む)、破片約

三四〇ヶであるが、これらのうち資料として観察したものは、復原したもの一二三ヶ、口部破片一四八ヶ、胴部破片三〇ヶ、底部破片五四ヶの合計三四五個体である(第一表参照)。またこれらの資料の各類土器の出

現頻度は第一類土器は深鉢形(やや完形三ヶ、破片一三五ヶ)一三八ヶ、浅鉢形(やや完形一ヶ、破片一一ヶ)一一ヶ、皿形一ヶ、臺形(破片)

一ヶの計一五二ヶである。第二類土器は深鉢形(破片)一六ヶ、浅鉢形(破片)七ヶ、臺形(破片)四ヶの計二七ヶである。第三類土器は深

鉢形(やや完形一ヶ、破片五二ヶ)五三ヶ、浅鉢形(破片)一八ヶ、臺形(不完形一ヶ、破片四ヶ)五ヶの計七六ヶである。第四類土器は深鉢

形(破片)四二ヶ、浅鉢形(やや完形四ヶ、破片二九ヶ)三三ヶ、皿形(破片)一ヶ、臺形(やや完形一ヶ、破片二ヶ)二ヶ、注口形(破片)一ヶの計八〇ヶである(第二表参照)。各類土器について詳述すればつぎの如くである。なお主要なものについては写真一五一三五に示し、拓本も

第六図—第一九図に示したので参照されたい。

第一類 土 器

(第一類土器特徴)

器形は深鉢形、浅鉢形、臺形が見られる。口縁は水平口縁のもの、水平口縁上に山形の小突起を二~三ヶ一組で數ヶ所に對称的に施しているものなどがある。底は大多数は揚底であるが、稀には丸底のものも見られる。器形の出現頻度は深鉢形が非常に多い。文様は地文として比較的の纖細な斜行繩文が全面に附されているが、このほかに主として口頸部附近に竹管用具を押刻してつくった爪型文を一~數列平行して環状に施され、これが主体文様をなししている。なお爪型文は底部にも一~數列平行して附されるものも見られる。爪型文の形態には細身のもの、半月形のもの、橢円形のものなどが見られ、また施文によつて器面が浮文様に隆起しているものも見られる。なお小型の土器では地文だけのものも見られる。

例 1 A.2 やや完形、深鉢形、高さ一五厘米、口径一三・五厘米、底径六・二厘米、厚さ〇・五~一・〇厘米。器形は口径と底径の長さの差がない深鉢形で、口縁は水平をなしている。底は揚底である。文様は地文として斜行繩文が全面に見られる。口頸部には無然と並行した三列の爪型文を施している(写真一五及び第六図)。

例 2 A.5 やや完形、深鉢形、高さ一七・三厘米、口径一三厘米、底径八厘米、厚さ〇・五厘米。器形は筒形に近い深鉢形で口縁は水平である。底は丸底に近い。文様は地文として斜行繩文が見られる。その他は口頸部にわずかの爪型文が見られる。また口縁上には全縁に刻目が見られる。(写真一五及び第六図)。

例 3 A.15 やや完形、深鉢形、高さ一〇・五厘米、口径一〇・二厘米、底径三厘米、厚さ〇・三厘米。器形は底径の小さい深鉢形で、揚底である。口縁上には二ヶ一組の小突起が認められる。文様は地文として斜行繩文が見られる。その他では口頸部に二列の爪型文が施然と見られる(第七図)。

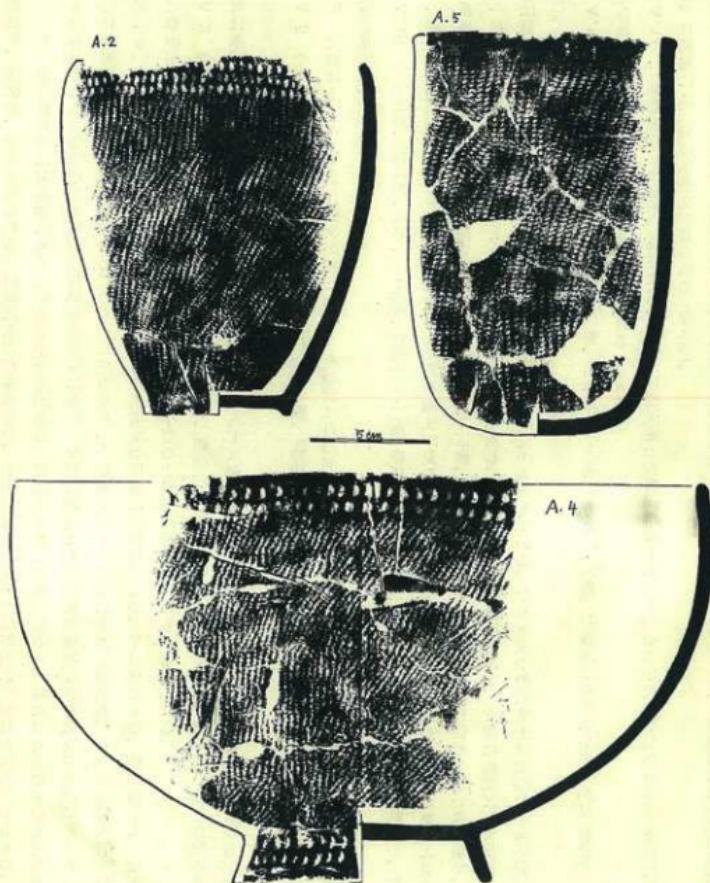
例 4 番外 1 やや完形、深鉢形、高さ二四・七厘米、口径二七・五厘米、底径八厘米、厚さ一厘米。器形は口径の大きい深鉢形で、口縁上には山形突起三ヶ一組(一ヶは大で二ヶは小)となつて、六~七ヶ所に相対して見られる。底は揚底である。文様は地文として斜行繩文が見られるが、脚部附近は省略されている。口頸部には比較的の整然と二列の爪型文が並列している。なお施文の際に突上げた部分が浮文様に見える(写真一七及び第八図)。

例 5 A.8 口頸部破片、深鉢形、高さ推定二〇厘米、口径推定一〇厘米、厚さ〇・五厘米。口縁上の所々に小突起が見られる。文様は地文の斜行繩文が見られ、口頸部には二列の爪型文が認められる(第九図)。

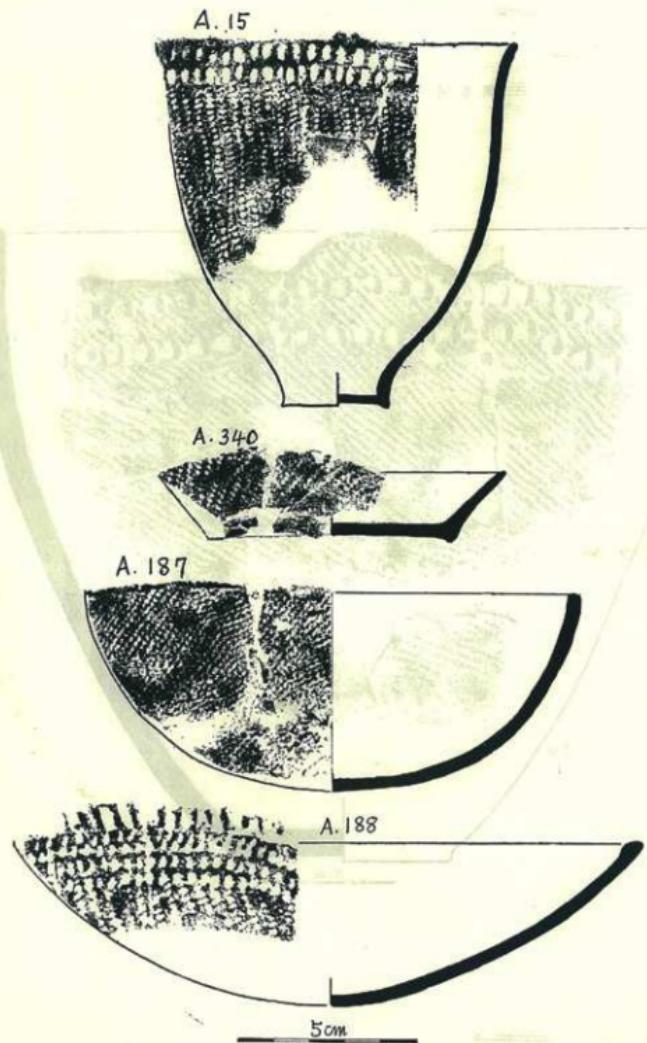
例 6 A.14 口頸部破片、深鉢形、高さ推定一五厘米、口径推定一五厘米。口縁上に三ヶ一組の小突起が見られる。文様は斜行繩文が地文として附され、口頸部には三列の爪型文が見られる(第九図)。

例 7 A.249 口頸部破片、深鉢形、水平口縁上に刻目が認められる。文様は斜行繩文の地文と、口頸部には一列の爪型文が見られる(第九

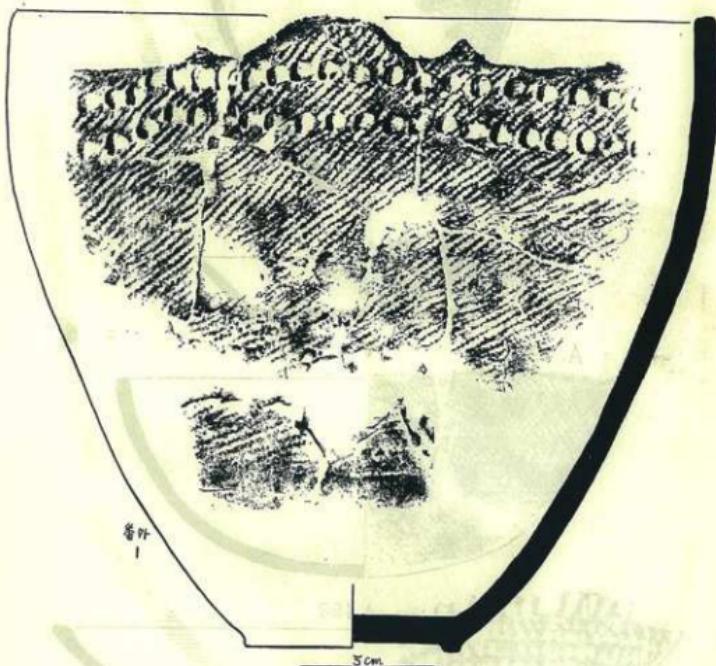
第6図 第3-4層出土 第一類土器1



第7圖 第3—4層出土 第一頸土器2

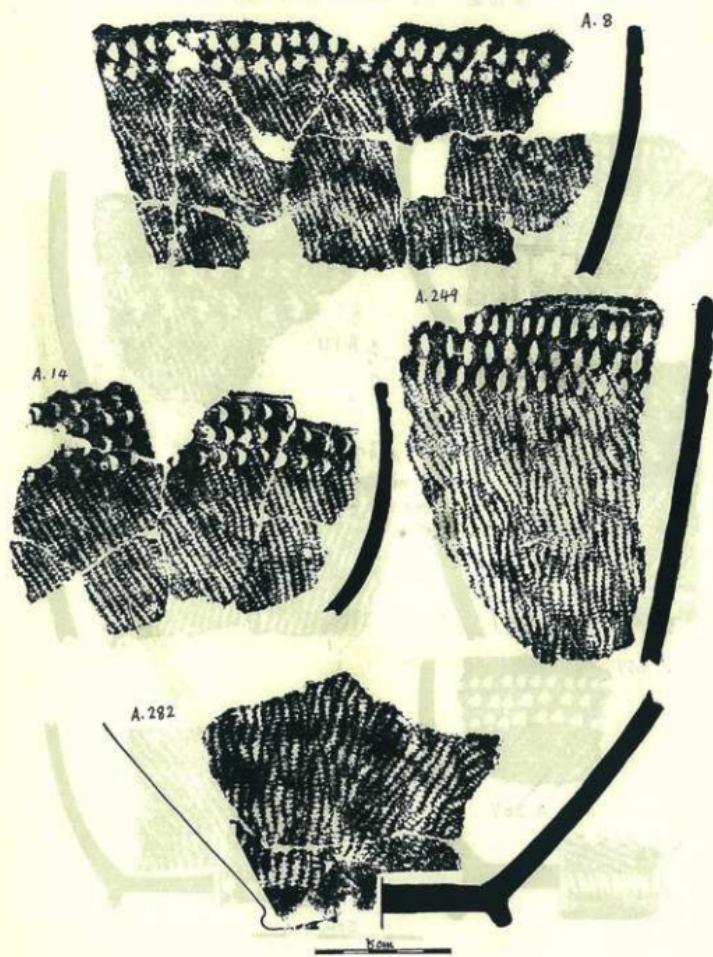


第 8 圖 第3—4層出土 第一類土器 3



一八

第 9 圖 第3—4層出土 第一類土器 4



第10図 第3—4層出土 第一類土器5

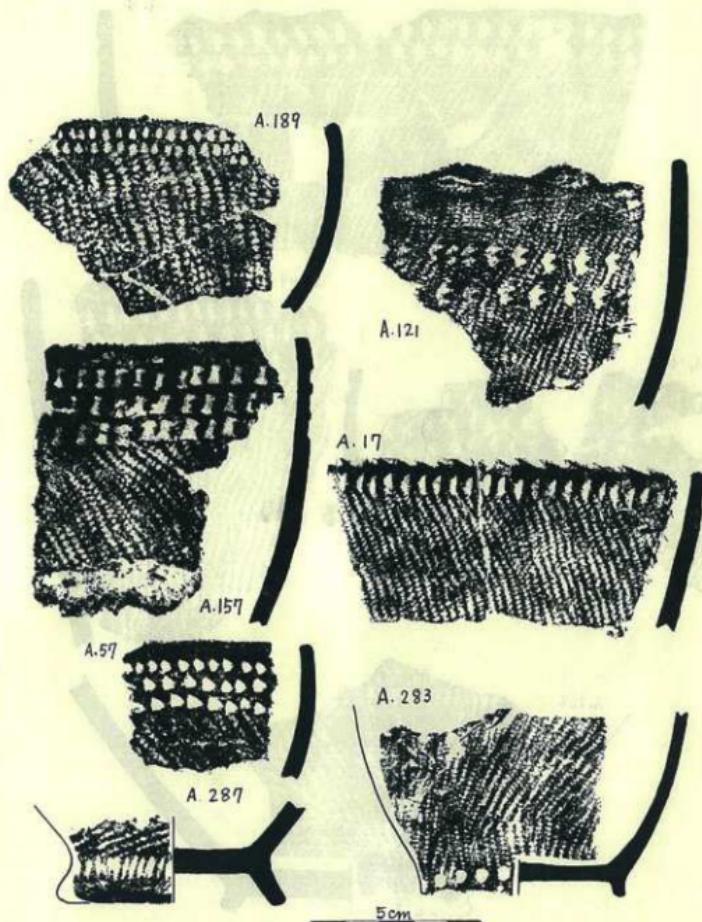


図)。

例9 A.157 口頸部破片、深鉢形、水平口縁をなす。文様は地文の斜行繩文と口頸部には三列の爪型文が見られる(第一〇図)。

例10 A.121 口頸部破片、深鉢形、口縁上に二ヶ一組の山形突起が認められる。文様は斜行繩文の地文と、頸部には二列の爪型文が見られる(第一〇図)。

例11 A.4 やや完形、浅鉢形、高さ一七・五厘米、口径三〇厘米、厚さ〇・七厘米。器形は台付の浅鉢形をなし、口縁の所々に小突起が見られ、突起上に刻目が認められる。文様は地文として斜行繩文が全面に見られる。また口頸部には二列の爪型文を残している。なお底部にも二列の爪型文が見られる(写真一六及び第六図)。

例12 A.187 やや完形、浅鉢形、高さ五・五厘米、口径一四厘米、厚さ〇・五厘米。器形は浅鉢形、丸底である。口縁は水平で、文様は地文として斜行繩文が器の全面に見られる。本例は地文だけの例である(第七図)。

例13 A.188 やや完形、皿形、高さ四・七厘米、口径一七・八厘米、厚さ〇・五厘米。器形は皿形、丸底である。口縁は水平をなすが、口縁上には刻目が認められる。文様は地文として斜行繩文が全面に見られる。また口頸部には三列の爪型文を整然と残している(第七図)。

例14 A.340 やや完形、皿形、高さ二厘米、口径九・八厘米、底径七厘米、厚さ〇・三一〇・五厘米。器形は皿形、揚底である。口縁は水平である。文様は地文の斜行繩文だけが器の全面に施されている(第七図)。

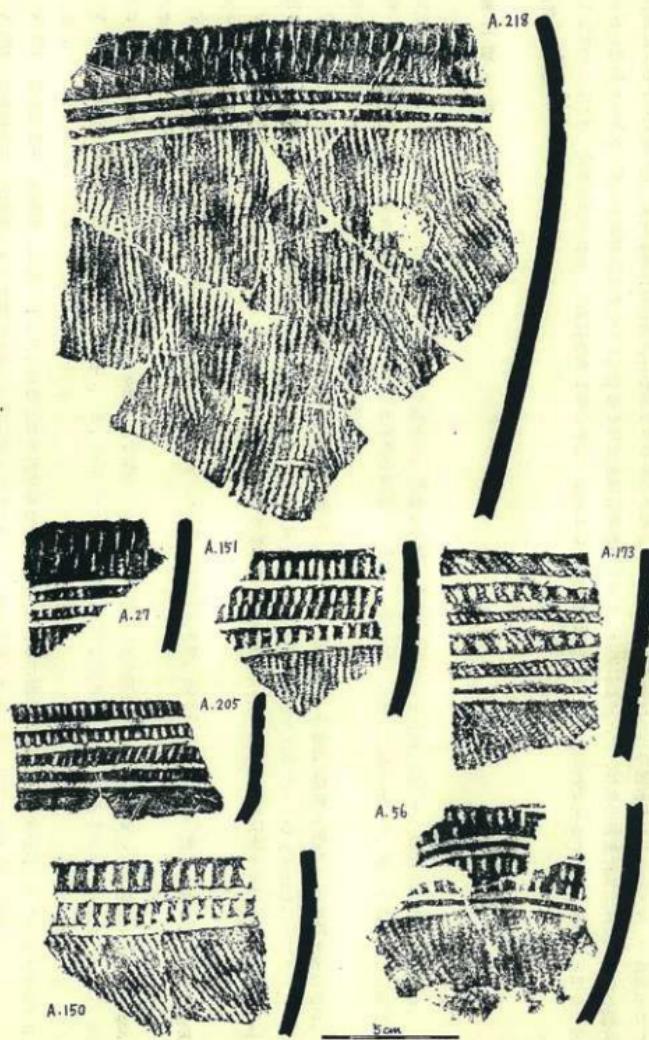
(訂正) 本類の資料について、筆者らが先に報告した「桧山南部の遺跡」(昭和三〇年七月)の第一〇頁の本文と、第一頁の第二二図に、型式不明で前期の土器と思われる記載したが、今回の調査で、晚期の土器であることが明らかになつたので、前文をここで訂正する。

第二類土器

(第二類土器特徴)

器形は深鉢形、浅鉢形、壺形が見られる。口縁は水平口縁のもの、水平口縁上に規則的な押圧による刻目を有するもの、口縁上に山形の小突起を有するものなどがある。底は大多数は揚底である。器形の出現頻度は深鉢形が多い。文様は地文として比較的纏細な斜行または縱行の繩文が全面に附されるものが多いが、体下部特に脚部附近は省略されるものも見られる。このほかに主として口頸部附近に爪型文を一一數条平行して環状に附され、更に爪型文の上下に刻線を一一數条廻らしており、爪型文と刻線文(直線文)が主体文様をなしている。爪型文の形態は爪型

第 11 図 第3—4層出土 第二類土器



のものと、刻点様に変化したものとが相半ばしている。

例 1 A. 218 口頸部破片、深鉢形、口縁は水平口縁をなすが、口縁上には刻目が認められる。文様は地文として斜行に近い繩文が見られる。口頸部には二列の爪型文と、その直下に三条の刻線文が見られる。爪型文と刻線文が分離して施文された例である(第一一図)。

例 2 A. 150 口頸部破片、深鉢形、口縁は水平口縁をなす。文様は斜行繩文が地文として附され、口頸部には二列の爪型文と、一条の刻線文が交互に施文されている(第一一図)。

例 3 A. 205 口頸部破片、深鉢形、口縁は水平口縁をなす。文様は斜行繩文が地文として附され、口頸部には四列の爪型文と四条の刻線文が交互に施文されている(第一一図)。

例 4 A. 173 口頸部破片、深鉢形、口縁は水平口縁をなす。文様は斜行繩文が地文として附され、口頸部には二列の爪型文が、六条の刻線文の中に開まれて施文されている(第一一図)。

例 5 A. 151 口頸部破片、深鉢形、口縁は水平口縁をなす。文様は斜行繩文が地文として附され、口頸部には四列の爪型文と、三条の刻線文が配合施文されている(第一一図)。

例 6 A. 56 臼副部破片、深鉢形、文様は斜行繩文の地文と、口頸部には四列の爪型文と五条の刻線文が配合施文されている(第一一図)。

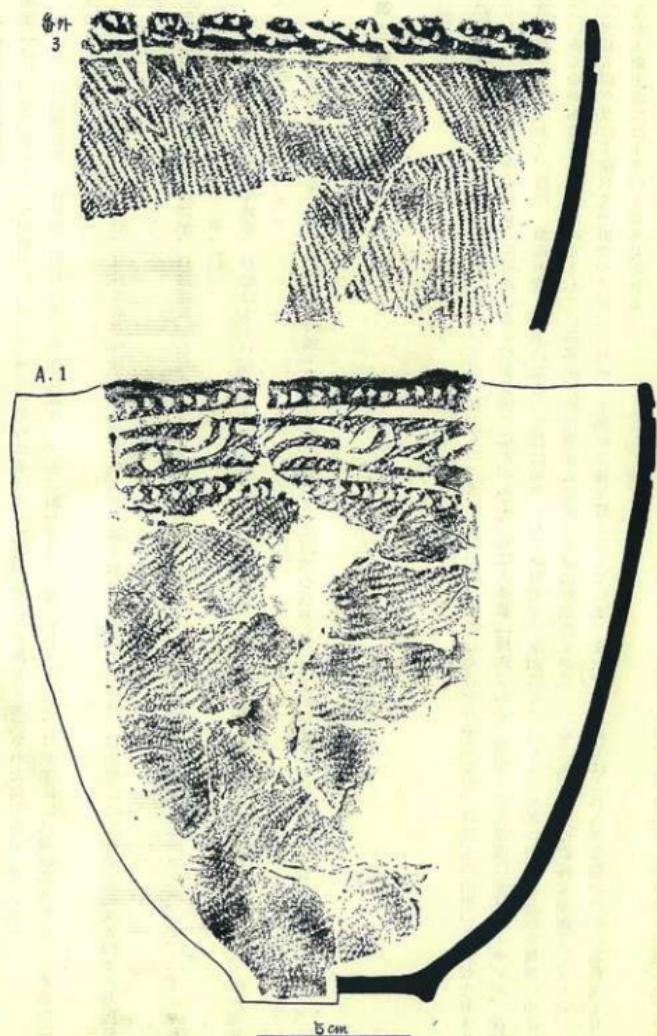
第三類土器

(第三類土器特徴)

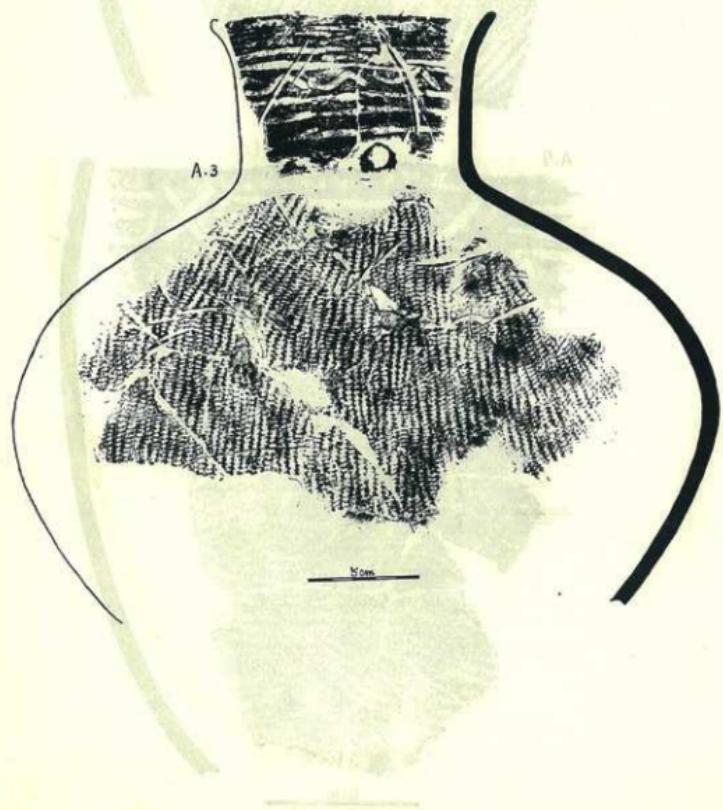
器形は深鉢形、浅鉢形、壺形が見られる。口縁は水平口縁のもの、水平口縁上に規則的な刻目を有するもの、口縁上に山形の小突起を有するもの(二一三ヶ一組で數ヶ所に相対的に附されるものが多い)などがある。底は大抵は揚底である。器形の出現頻度は深鉢形が多いが、浅鉢形も次第に数を増しており、器は一般に中型・小型になる。文様は地文として斜行繩文が全面に附されるものが多いが、口頸部文様帶の中は磨消されているものがある。このほかに主として口頸部附近に爪型文と直線文並びに短刻線文が見られる。短刻線文は直線と曲線を交叉した、いわゆる三叉状入組文及び羊齒状文が組合つて変化を見せ、本類の主体文様をなしている。また壺形土器ではこれらの文様のほかに貼付文も見られる。なお本類土器には未塗の土器も見られる。

例 1 A. 1 やや完形、深鉢形、高さ二〇・八釐、口径二・五釐、底径六・五釐、厚さ〇・五釐。器形は底径の小さい深鉢形で口縁には二ヶ一

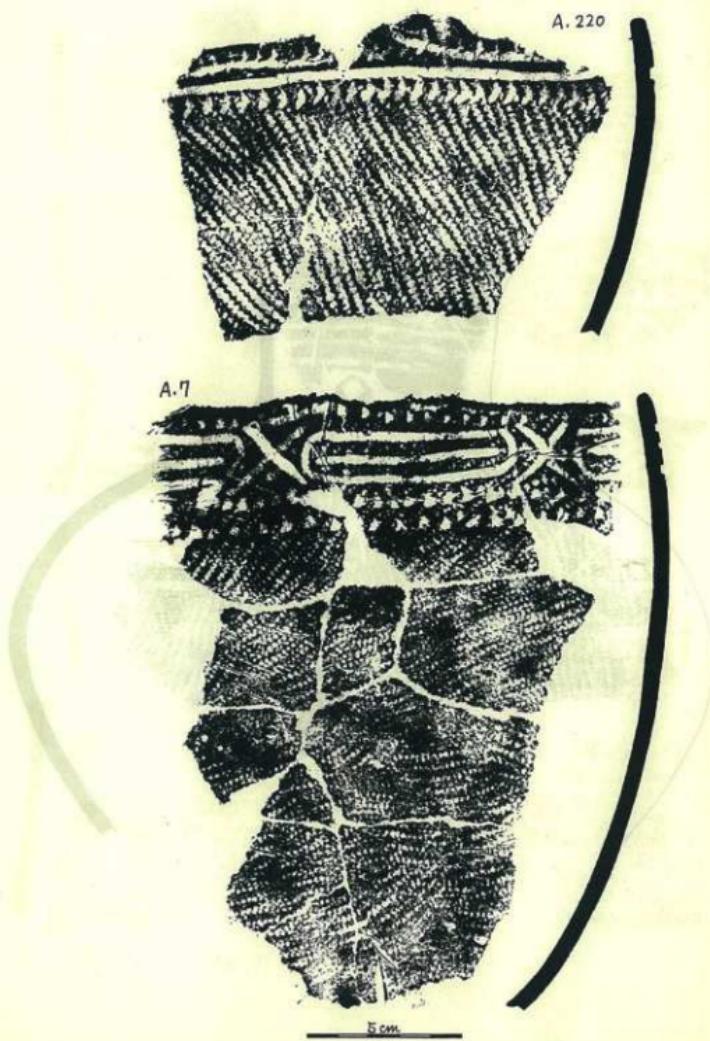
第 12 図 第 3—4 層出土 第三類土器 1



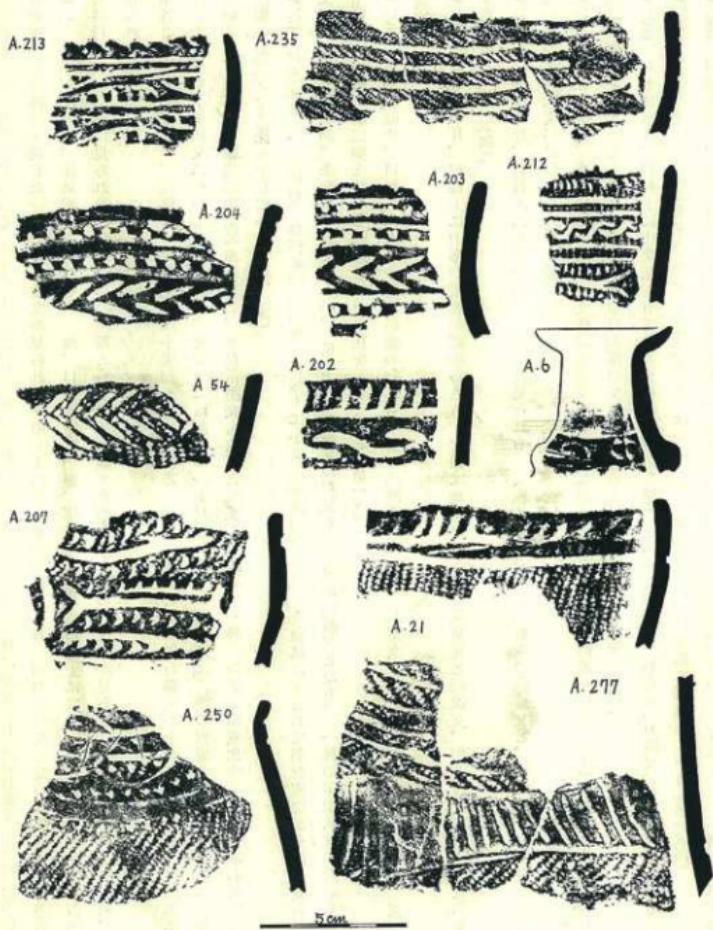
第 13 圖 第3—4 層山土 第三類上層 2



第 14 圖 第 3—4 層出土 第三類土器 3



第 15 圖 第 3—4 層出土 第三類土器 4



5 cm

組の小突起が數ヶ所に対称的に見られる。突起の上には刻目が認められる。底は揚底である。文様は地文として斜行繩文が全面に見られる。口頬部には曲線と直線の短刻線で表現した一種の羊齒状文が見られ、その上下に各一条の刻点文と各一列の爪型文が見られる（写真一九及び第一二図）。

例2 A.7 口頬部破片、深鉢形、高さ推定二〇mm、口径推定二〇mm、厚さ〇・五mm。口縁上には二ヶ一組の小突起が認められる。文様は地文として斜行繩文が全面に見られる。口頬部には曲線と直線の短刻線で表現した一種の三叉文が見られ、それを囲んで上に一列、下に二列の爪型文が見られる（第一四図）。

例3 番外3 口頬部破片、深鉢形、口縁上には小突起が認められる。文様は地文として斜行繩文が全面に見られる。口頬部には短刻線と爪型文を混じた一種の羊齒状文に近いものが見られ、その下に直線文が一条見られる。口頬部には二条の直線文を囲んで上下に二列の爪型文が施文されているが、上部の直線文が次第に曲線化し、また爪型文も曲線と交差して次第に一種の羊齒状文に変化する様態を示している。本例は第二類と第三類の過渡的な文様を示している（第一二図）。

例5 A.21 口頬部破片、深鉢形、口径推定一四mm。口縁上に小突起が認められる。文様は地文として斜行繩文が全面に見られる。口頬部には爪型文が一列と直線文が二条施文されているが、爪型文と直線文は交叉して次第に曲線文となり、一種の羊齒状文に近いものになつている。本例も前例と同様に第二類と第三類の過渡的な存在を示している（第一五図）。

例6 A.207 口頬部破片、口縁上に山形の突起が認められる。文様は地文のほかに、爪型文と直線文、短直線文を配合して第一五図）。

例7 A.212 口頬部破片、口縁上に山形の突起が認められる。文様は地文のほかに、爪型文と直線文、短直線文を配合して多彩である（第一五図）。

例8 A.213 口頬部破片、口縁上に刻目があつて起伏が見られる。文様は地文のほかに数条の直線文と、短曲線文と爪型文の交叉によつてつくれられた一種の羊齒状文が見られる（第一五図）。

例9 A.204 口頬部破片、水平口縁をなす。文様は爪型文の変化した刻点文と直線文、短直線文を以つくる羽状文を巧に排列している。本例の文様帶は次例（A.203）とともに、壺形土器の口頬部の文様帶であるように推察される（第一五図）。

例10 A.203 口頬部破片、口縁上に小突起を有する。文様は前例（A.204）と同じで、刻点文、直線文、短直線文からなる（第一五図）。

例11 A.54 口頬部破片、口縁は水平である。文様は地文のほかに、短直線の羽状文を口頬部に配置している（第一五図）。

例12 A.202 口頬部破片、水平口縁をなす。文様は爪型文、直線文、短曲線文を排列した一種の三叉文に近い。本例も壺形土器の口頬部文

縫帶であるように思われる（第一五図）。

例13 A.3 やや完形、壺形、高さ推定二八厘米、口径二二・八厘米、頸部長さ七・五厘米、腹径三一厘米、厚さ〇・四一〇・七厘米。口縁は水平をなす。

文様は口頸部と体部に分れ、体部には全面に斜行縞文が地文として附されている。口頸部には短曲線で構成する一種の三叉文が見られ、それを回んで上に二条、下に三条の直線文が見られる。また頸部に直径一・一・三厘米の円形の貼附文が九ヶ所に見られる（写真三〇及び第一三図）。

例14 A.6 口頸部破片、壺形、口径五厘米、厚さ〇・五厘米。口縁は水平をなす。文様は頸部に渦状の曲線文が認められる。また頸部に貼附文も見られる。なお本例はいわゆる朱塗土器で器面に朱が認められる（写真三五及び第一五図）。

例15 A.211 頸部破片、本例は小破片のみであるが、器面に朱が認められるもので、朱塗土器である（写真三五）。

例16 A.250 口頸部破片、壺形、口縁は水平である。文様は口頸部と体部が異り、体部には斜行縞文が見られる。口頸部には二列の爪型文と二条の直線文と短曲線文が配合して見られる（第一五図）。

第四類 土器

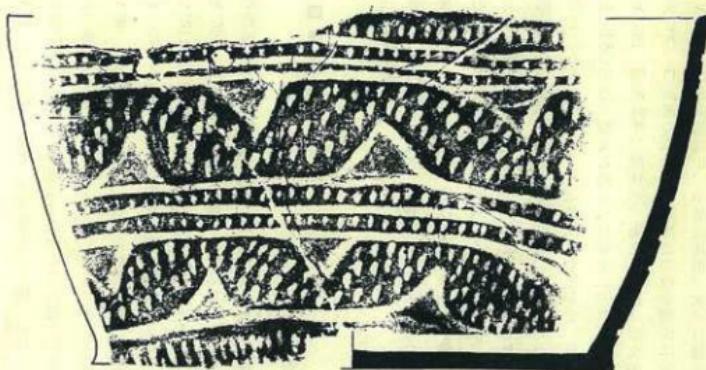
（第四類土器特徴）

器形は深鉢形、浅鉢形、皿形、壺形、注口形が見られる。口縁は水平口縁のもの、水平口縁上に規則的な刻目を有する者の、口縁上に山形の小突起を有するものなどがある。底は揚底が多いが、浅鉢形では丸底、平底なども見られる。器形の出現頻度は深鉢形と浅鉢形がほぼ同数である。壺形のほかに皿形、注口形も見られる。器は一般に中型—小型のものが多い。文様は第一、第二、第三類に見られた地文の斜行縞文は殆んどない。土体文様は直線と曲線の交叉によって構成されるものと、これらに爪型文の変化と見られる刻点文を配合し、更にこれに磨消手法による浅い浮彫の手法の文様を配合したものによって構成されている。文様は口頸部のみのものも見られるがすぐなく、口頸部のみならず、体部の全面に施されているものが多い。また底面にも爪型文（刻点文）が施されるもののが見られる。なお少數であるが爪型文が单独で口頸部に見られるもの（第二類の爪型文施文と同じ）、口縁上に刻目だけを施したもの、全く無文のものなども見られる。

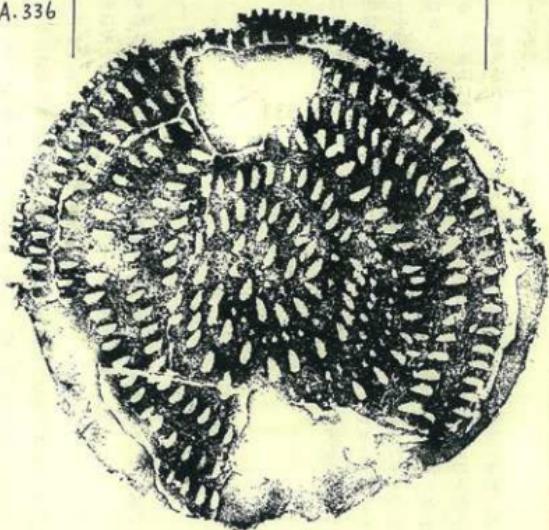
例1 A.281 頸部破片、深鉢形、揚底。文様は地文がなく、直線文と爪型文の変化した刻点文及び山形に表現された曲線文の巧みな配合によつて構成され、口頸部のみならず脚部までの全器面上に施文されている（第一九図）。

例2 A.210 口頸部破片、小型深鉢形、水平口縁と推察される。文様は地文がなく、爪型文の変化した刻点文及び山形に表現された曲線文

第 16 圖 第 3—4 層出土 第四類土器 1



A.336

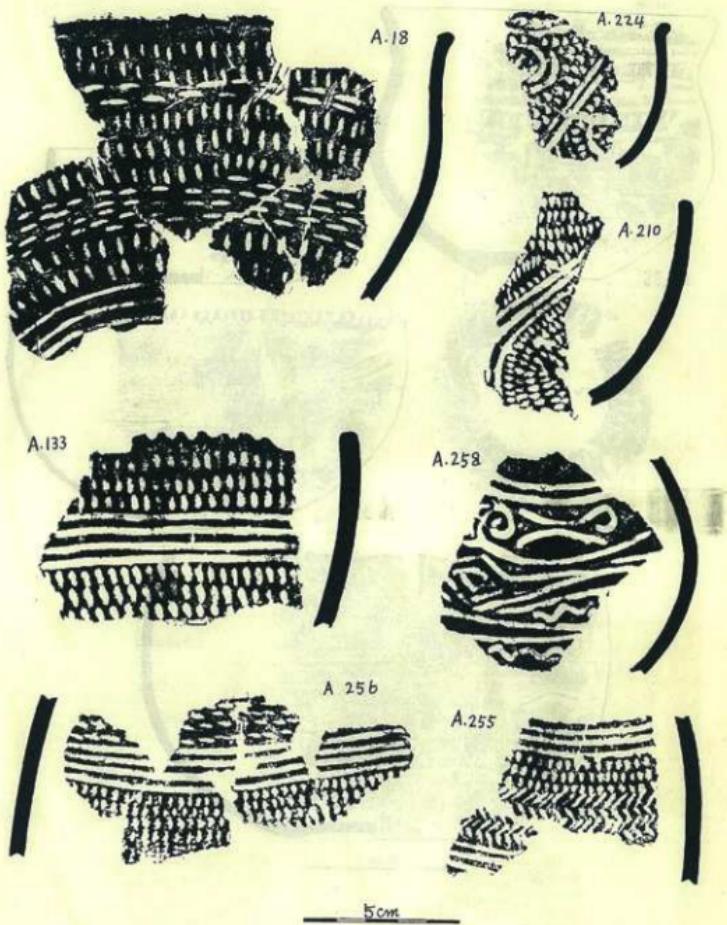


三〇

第 17 図 第3—4層出土 第四類土器 2

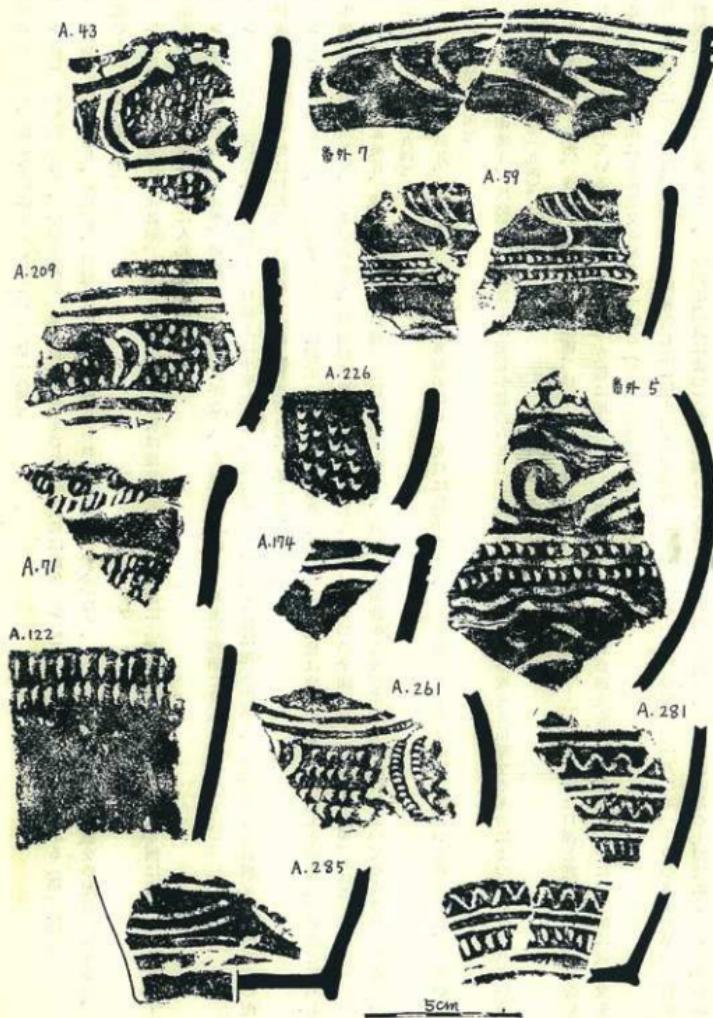


第18圖 第3—4層出土 第四類土器3



5cm

第19圖 第3—4層出土 第四類土器4



とで構成されており、器の全面に施文されている（第一八図）。

例3 A.224 口頸部破片、小型深鉢形。水平口縁と推定される。文様は前例（A.210）とほぼ同様の表現である（第一八図）。

例4 A.59 口頸部破片、深鉢形、口縁上に小突起が認められる。文様は地文がなく、爪型文と直線文及び曲線文の配合からなるが、文様は口頸部のみに見られる（第一九図）。

例5 A.122 口頸部破片、深鉢形。水平口縁である。文様は地文がなく、口頸部に二列の爪型文が見られる。本例は或は第一類となすべきであるかも知れないが、仮に本類に入れた（第一九図）。

例6 A.285 底部破片、深鉢形、揚底。文様は地文がなく、直線文と曲線文が数条全器面に見られる（第一九図）。

例7 A.18 口頸部破片、浅鉢形、揚底。文様は地文がなく、爪型文と短直線文及び直線文の配合によつて構成されるが、文様は口頸部から全体部の全面に施文されている（第一八図）。

例8 A.133 口頸部破片、浅鉢形？。口縁上に押圧による刻目が整然と見られる。文様は地文がなく、爪型文と直線文を整然と排列したもので、本例では三列の爪型文、三条の直線文、二列の爪型文が順に重疊している。なお器の全面に施文している（第一八図）。

例9 A.209 口頸部破片、浅鉢形？。水平口縁。文様は地文がなく、直線文と短曲線文及び爪型文の配合によつて構成されている。一種の三叉文が見られる（第一九図）。

例10 A.43 口頸部破片、浅鉢形？。口縁上に突起がある。文様は地文がなく、短曲線文と爪型文の配合によつて構成され、一種の三叉文をなしている（第一九図）。

例11 A.71 口頸部破片、浅鉢形？。口縁上に突起がある。文様は地文がなく、直線文と爪型文の配合によつて構成されている。また貼附文も見られる（第一九図）。

例12 A.336 やや完全形、浅鉢形、高さ一一・四厘米、口径二一・四厘米、底径一六厘米、厚さ〇・五一・五厘米。器形は口径と底径の差のすくない浅鉢形で、口縁は水平をなしている。底は平底である。文様は地文がなく、器の全面に爪型文と直線文を交互に施文し、更に浮文的に波状文を構成している。また底面全面にも爪型文を施文している（写真二）及び第六図）。

（訂正）本資料については、筆者らが先に報告した「松山南部の遺跡」（昭和三〇年七月）の写真一一及び第一〇頁の本文と第一一頁第一一圖に、野幌式土器として記載したが、今回の調査によつてそれが誤りであることが判明したので、ここに晚期の土器であることを明らかにして前文を訂正する。

例 13 A.337 やや完形、浅鉢形、高さ九一〇・三厘米、口径一四厘米、底径五厘米、厚さ〇・五厘米。水平口縁をなす。底は軽い場底である。文様は無文である(写真二二及び第一七図)。

例 14 A.339 やや完形、浅鉢形、高さ七厘米、口径一二・一厘米、口縁上に刻目を施しているが、その他には文様がなく無文である。底は丸底である(第一七図)。

例 15 A.10 やや完形、浅鉢形、高さ四・五厘米、口径一〇厘米、厚さ〇・三一〇・五厘米。水平口縁、丸底で、文様は無文である(第一七図)。

例 16 A.226 口頸部破片、浅鉢形、水平口縁をなす。文様は地文なく、口頸部に直線文と爪型文の文様化したものが見られる(第一九図)。

例 18 A.338 やや完形、広口壺形、高さ九厘米、口径一一・七厘米、底径四厘米、厚さ〇・五厘米、口縁は水平をなし、底は揚底である。文様は地文がなく、口頸部から胴部までの間に直線文と短曲線文及び爪型文を配合している。また底面にも爪型文を施文している(写真二二及び第一七図)。

(訂正) 本資料について、筆者らが先に報告した「松山南部の遺跡」(昭和三〇年七月)の第一〇頁の本文と第一一〇頁の一、二図に、野幌式土器として記載したが、本式土器も晚期の土器であることが判明したので、前文を訂正する。

例 19 A.258 口頸部破片、壺形。文様は地文なく、直線文と短曲線文の配合によつて一種の羊齒状文を形成している(第一八図)。

例 20 番外 5 口頸部破片、壺形。文様は地文がなく、直線文と曲線文、爪型文を重複して施文している(第一九図)。

例 21 A.261 胴部破片、壺形、文様は地文なく、直線文、曲線文、爪型文を配合して施文している(第一九図)。

例 22 A.256 胴部破片、壺形。文様は地文の繩文がわずかに見られるが、四条の刻線文を挟んで、数列の爪型文を上下に施文している(第一八図)。

例 23 A.225 胴部破片、壺形。文様は地文がなく、直線文、爪型文、爪型文でつくった羽状文、直線文と重複して施文して多彩である(第一八図)。

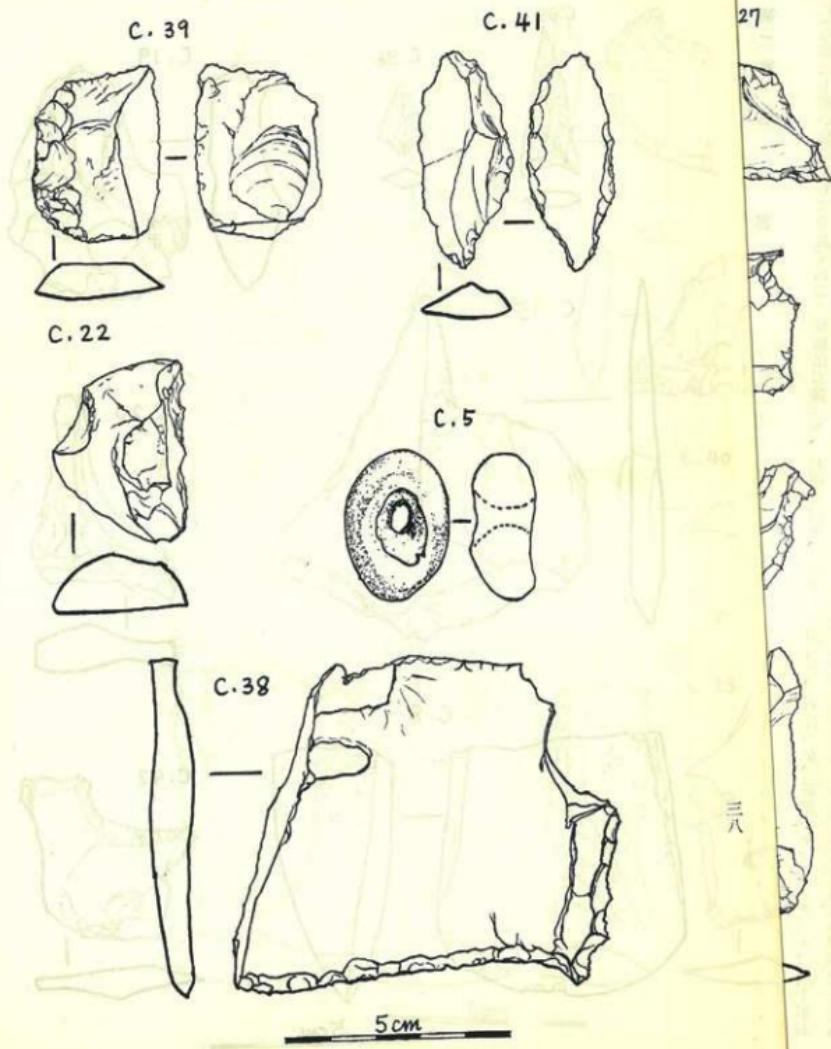
例 24 番外 7 口頸部破片、皿形。口縁は水平口縁をなす。文様は地文がなく、直線文と短曲線文が、一種の三叉文をなしている(第一九図)。

第二節 石 器

出土した石器は土器の数に比して少数である。種類は石鏃二ヶ、石小刀四ヶ、粗製石小刀八ヶ、石錐二ヶ、石斧二ヶ、ノツチ三ヶ、庖丁形石器一ヶ、スクレーパー二ヶなどで合計二二ヶである。これらの出現頻度は第三表に示したので参照されたい。石器各々の詳細はつきの如くである。

3306. C39 → C22
C22 → C39

第22図 第3-4層出土の石器3



る。なお石器の主要なものは写真三七一三八及び第二〇一一図に示したので参照されたい。

石 鐵

完形品が二ヶ出土している。一例（C.33）は長さ三・四厘、幅一・四厘、厚さ〇・四厘で、抉入のある無柄石鐵である。他の一例（C.36）は長さ一・五厘、幅一厘、厚さ〇・五厘の小型で有柄石鐵である。石質はいずれも黒曜石である（写真三八及び第二一図）。

石 小 刀

完形品二ヶ、不完形二ヶ計四ヶが出土している。四ヶ中一ヶは横型、一ヶは横型と縱型の中間型式、一ヶは不明である。すなわち一例（C.6）は縱型有柄で、剥片を利用した長さ三・七厘、幅四・二厘、厚さ一・四厘で、略四角形をなし、柄を除く三辺がサイド・スクレーパー状に作出されている。一例（C.27）は縱、横中間型式で、これも剥片を利用しており、表裏とも平坦面をなしている。長さ六・五厘、幅二・八厘、厚さ〇・八厘で、横円形をなし柄を除いた二辺縁がサイド・スクレーパー状に作出されている。一例（C.40）は不完形であるが、縱、横中間型式と思われるもので、長さ現存四・三厘、幅二・四厘、厚さ〇・八厘、柄を除いた二辺縁がサイド・スクレーパー状に作出されている。一例（C.34）は長さ現存五・二厘、幅二・二厘、厚さ一・一厘で、二辺縁がサイド・スクレーパー状に作出されている（写真三七及び第二〇図）。

粗 製 石 小 刀

完形品六ヶ、不完形品二ヶの計八ヶが出土している。いずれも一面が平坦面をなし他の一面に數剥離面を有する剥片を利用して、ナイフ或はサイド・スクレーパーに使用したと思われる種類のものである。（C.4）は長さ六・五厘、幅四・五厘、厚さ一・三厘で、二辺縁がサイド・スクレーパー状に作出されている。石質は頁岩である。その他（C.14, 16, 21, 23, 26, 28）の六例は前例同様いざれも一面が平坦面をなし、一面に數剥離面を有する、長さ七厘前後、幅三厘前後の横長の剥片を利用したもので、二辺縁乃至二辺縁が刃状になつていて、石質は頁岩五例、硅岩一例である。（C.41）は長さ四・八厘、幅一厘、厚さ〇・七厘の小型横円形のもので全辺縁がサイド・スクレーパー状に作出されている。石質は粘板岩である（写真三七一三八及び第二〇図）。

完形品一ヶ(C.15)が出土している。本資料は体部と針部からなつてゐる有頭石錐である。体部は長さ七・二厘、幅四・九厘、厚さ〇・六厘で、針部は長さ一・三厘、茎部幅一・六厘である。石質は粘板岩である(第二一図)。

石斧

不完形品一ヶ(C.8)が出土している。本資料は長さ推定一二厘(現存五・六厘)、幅五・二厘、厚さ二・六厘である。刃の側面鋸は湾刃であり、正面鋸は曲刃をなす。よく磨研されたいわゆる始刃の石斧である。石質は緑色泥岩である(写真三七及び第二一図)。

ノツチ

完形品三ヶが出土している。一例は(C.42)長さ四厘、幅三厘、厚さ〇・五厘のやや四角形の剥片の一辺縁に加工して曲刃部をつくつたものである。一例(C.20)は適宜な剥片の一辺縁の曲刃した剥離面を利用したものである。一例は(C.19)は長径五・四厘、短径三・九厘、厚さ一・四厘の梢円形の石屑の一辺縁を打ち欠いて曲刃部をつくつたものである。石質はいずれも硅岩である(写真三七・三八及び第三一図)。

スクレーパー

完形品一ヶが出土している。いずれも一面が平坦面をなし、一面の辺縁を加工したもので、形は梢円形に近い小型のものである。すなわち(C.22)は長さ三・七厘、幅二・七厘、厚さ〇・六厘で、全辺縁がスクレーパー状に作出されている。(C.39)は長さ四厘、幅二・九厘、厚さ一・二厘で、半月形の一辺だけがスクレーパー状に作出されている。石質は兩例とも硅岩である(写真三八及び第三一図)。

庖丁形石器

完形品が一ヶ出土している。すなわち(C.38)は四角形に近い薄く大型の庖丁形の石器で、高さ七・一厘、幅八厘、厚さ一厘である。両面とも平坦面をなしてゐる。刃は二辺縁に見られる。石質は粘板岩である(第三二図)。

第3表 石器、装身具の出土数と石質

種類	完形				不完全形		合計	
	頁岩	硅岩	粘板岩	黑曜石	安山岩	頁岩	綠色泥岩	
識刀刀 小石 石祖 石石 ノス ク丁 泡 痕	2 4 1 1 3 2 1 1 1		1 1 3 2 1		2 1 1	2 2 1		2 4 8 1 1 3 2 1 1 23
合計	6	6	3	2	1	4	1	

(註) 石柄は75ヶ出土しており、石質は頁岩、硅岩、粘板岩があるが、大部分は頁岩である。

装身具と思われるものが一ヶ出土している。すなわち(C.3)は梢円形の小石の中央部を穿孔したもので、一種の垂飾と思われる。長径六・四厘、短径二・六厘、厚さ一・五厘であり、中央部の孔はいわゆる虫食いといわれる部位で、ここに穿孔したもので、孔の長径は〇・七厘である。石質は安山岩である(写真三八及び111図)。

第四節 自然遺物

一 動物骨格類

頭蓋骨の小破片が三十数片発見された。これらの骨は化石化して硬い。形態から判断すれば、その曲弯の状態、縫合の状態、厚さなどから、かなり人骨に近い印象を受けるが、人骨と断定するには細片すぎる。なお本骨格片が動物とすれば、あざらしなどの幼獣に近い形態であるが、その真偽は明らかでない。四肢骨の破片が十数片同時に出土しているが、これらは人骨ではなく、全例小動物の管状骨である(写真三九)。

二 貝類

貝類はわずかに四個体四片が出土している。その種類はつぎの如くである(写真四〇)。

あかがい *Anadara (S.) broughtoni* (Schrenck)

うばとりがい *Spisula cf. sachalinensis* (Schrenck)

Serripes sp.

本遺跡の第一層よりは撫文式土器並びに須恵器が出土し、第三層—第四層よりはいわゆる鬼ヶ岡式土器の上部乃至中葉に位置するものと、これに伴出する石器類が出土している。

本遺跡の第一層より出土した撫文式土器の特徴は、器質堅硬で、器形は口頸部が外彎し、平縁で平底の深鉢形が大多数を占めている。文様は擦痕が器の全面に見られ、口頸部附近には刻線文を施文するが、体部に及ぶことはすくなく、文様は概して單純である。本遺跡出土の撫文式土器を道中央部、道北部の同式土器に比較すれば、一般に文様が簡略であるよう推广察される。また須恵器破片が出土しているが、おそらく本土器は撫文式土器と伴出したもので、年代的には並行關係にあるものと考えられる。

本遺跡の第一層で認められた住居遺構は、円形に近く、直径四・八五メートル前後と推定される。円形の外郭の内縁に柱穴を排列している。本住居址の年代を決定する確証はえられなかつたが、おそらく撫文文化期以降に構築されたものと推察される。

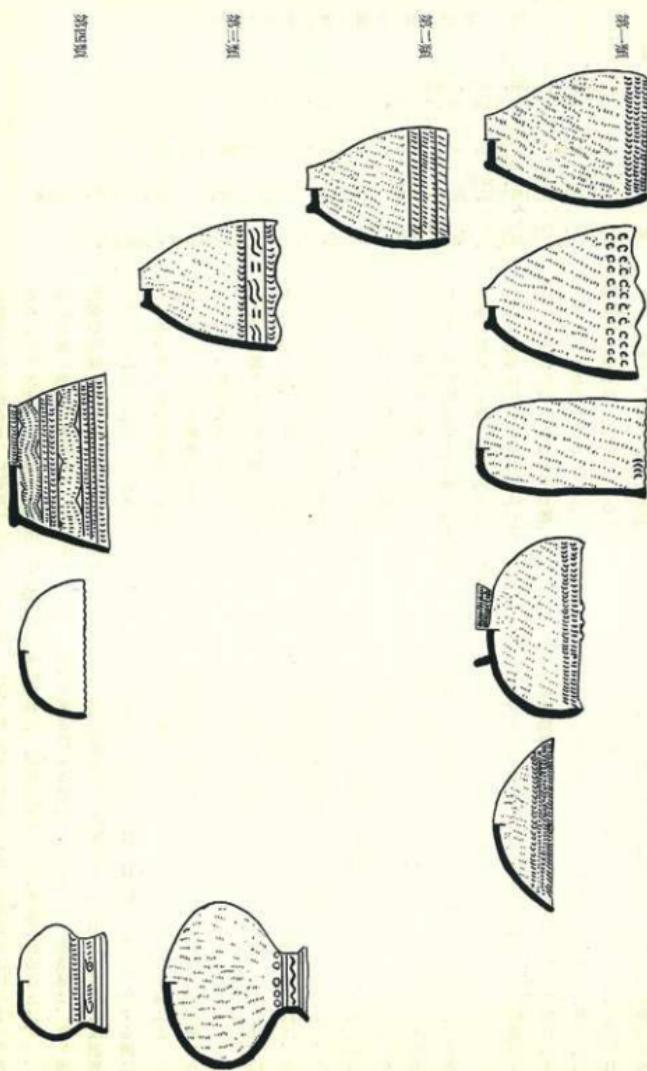
本遺跡の第三層—第四層より出土したいわゆる鬼ヶ岡式土器には実質的には精良品と粗製品とがあるが、資料が乏しいので、精粗に較然と分けるのを避けてつぎの四分類を行つた。すなわち第一類より第四類に分類したが、これらには若干の種類が見られる。各類土器の特徴については第三章に詳述したが、器形と諸特徴を要約して、第三圖A、Bに模式として示した。なお各類土器の顯著な特徴をあげればつぎの如くである。

すなわち本式土器の器質は堅硬であり、厚さは薄い。器形は深鉢形、浅鉢形、壺形、皿形、注口形などを見られる。各形土器の出現頻度は第一類、第二類土器では深鉢形が多く、第三類土器では深鉢形について浅鉢形が多くなり、第四類土器では深鉢形と浅鉢形とがほぼ同数となる。器の大いさは大型のものもあるが概して中型のものが多い。口縁部は水平口縁のものと、二ヶ乃至三ヶ一組の山形小突起、あるいは波状の突起を有するものと見られる。底は第一類、第二類、第三類土器では揚底が大多数を占めているが、第四類土器では平底が多い。文様は第一類、第二類、第三類土器では、地文として斜行繩文が附されるが、第四類土器には地文が殆んど見られない。各類土器を通じて普遍的に見られる文様は爪型文で、主として口頸部附近に並列して數列整然と施文される。文様構成は第一類土器では爪型文、第二類土器では爪型文と直線文、第三類、第四類土器では爪型文と直線文・曲線文が夫々文様要素となるが、第四類土器ではこのほかに磨消手法が盛行し、また朱塗土器及び無文のものも見られる。なお本遺跡の小範囲での出土品であるので、器形乃至文様についてはここに記述したほかにも、他の種類のものがありうることはいうまでもない。

本遺跡出土のいわゆる鬼ヶ岡式土器の編年的位置は、第三類、第四類土器に見られる、短直線及び短曲線で構成された文様は、いわゆる大洞式土器の三叉状文乃至至齒状文に近似しており、大洞、B、B₁、C、C₁といわれる範囲のものである。しかしながら大洞B—C—C₁がその主体を占めているので、本資料は編年的には大洞B—C—C₁の時期に比定しうるものと考えられる。なお資料は大洞B、B₁、C、C₁、C₂の

本報告書の作製に当り、東京大学山内清男氏、東京国立博物館佐藤達夫氏、慶應大学江坂輝彦氏、小樽博物館竹田輝雄氏、钏路博物館沢尻四郎氏に種々御助言をいただいた。また出土石器の石質については北海道大学石井次郎氏、貝類については魚生吉氏並びに篠原了之氏に感謝する。

第23図A 各類土器の器形



the same time, the author has been able to study the effect of the different factors on the production of the different species of *Agave*. This has been done by means of the following experiments:
1. Experiments with the different species of *Agave* under the same conditions.
2. Experiments with the same species of *Agave* under different conditions.
3. Experiments with different species of *Agave* under different conditions.
4. Experiments with the same species of *Agave* under different conditions and at different times.
5. Experiments with different species of *Agave* under different conditions and at different times.
The results of these experiments have been published in the following papers:
1. "Experiments with the different species of *Agave* under the same conditions," in the *Journal of the Royal Microscopical Society*, Vol. 21, p. 103, 1892.
2. "Experiments with the same species of *Agave* under different conditions," in the *Journal of the Royal Microscopical Society*, Vol. 21, p. 103, 1892.
3. "Experiments with different species of *Agave* under different conditions," in the *Journal of the Royal Microscopical Society*, Vol. 21, p. 103, 1892.
4. "Experiments with the same species of *Agave* under different conditions and at different times," in the *Journal of the Royal Microscopical Society*, Vol. 21, p. 103, 1892.
5. "Experiments with different species of *Agave* under different conditions and at different times," in the *Journal of the Royal Microscopical Society*, Vol. 21, p. 103, 1892.

161

上ノ国遺跡

昭和三十六年五月三十日印刷
昭和三十六年五月三十日發行

〔非売品〕

印刷所

札幌市北一条四二丁目
札幌印刷株式会社

印刷者

北海道檜山郡上ノ国村役場
同上ノ国村教育委員会



五 四 三 八 七 六 六 三 二

五 一 三 五 二 七 七 行

誤 正 誤
⑧ 砂崎島 深さ
木炭末が多量に
円筒文化
円筒土器文化
側型文
(SCHREINER)
二、謹人で

表

正 誤
⑨ 砂崎島 深さ
木炭末が多量に
円筒土器文化
円筒土器文化
側型文
(SCHREINER)
二、謹人で

卷之二

二

卷之二

二

卷之二

二

卷之二

二

卷之二

二